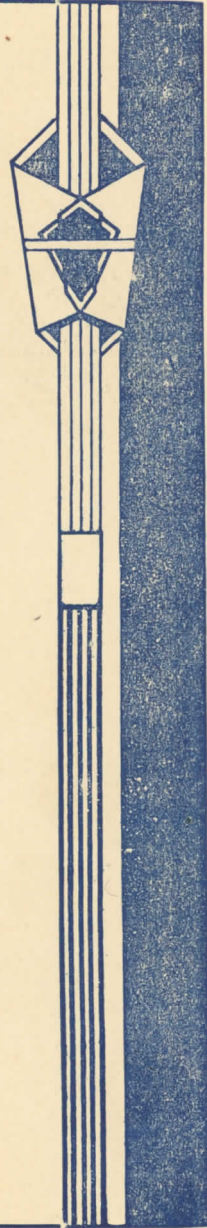


昭和二年六月二十六日印刷  
昭和二年七月 日發行



# 道頓堀

四月号  
第十一輯



中元・暑中の御贈答には

# 白木屋の商口券

共通店  
東京本店  
大阪支店  
京阪出張店  
阪神出張店

安く賣る店  
買ひよき店



大阪場筋  
白木屋

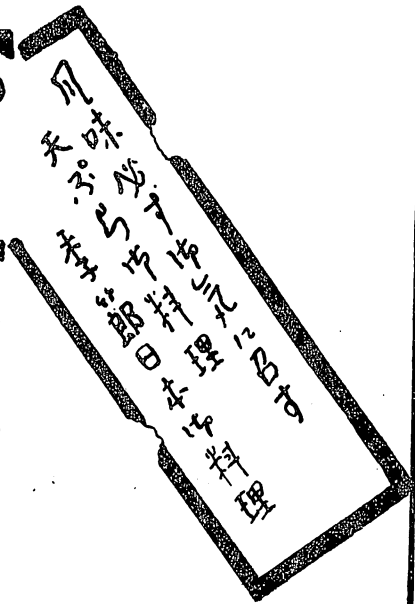
電話(代表)本町三〇番

御芝居歸りには打揃ふて

お坐席では是非御會食を



# 吉又屋食堂

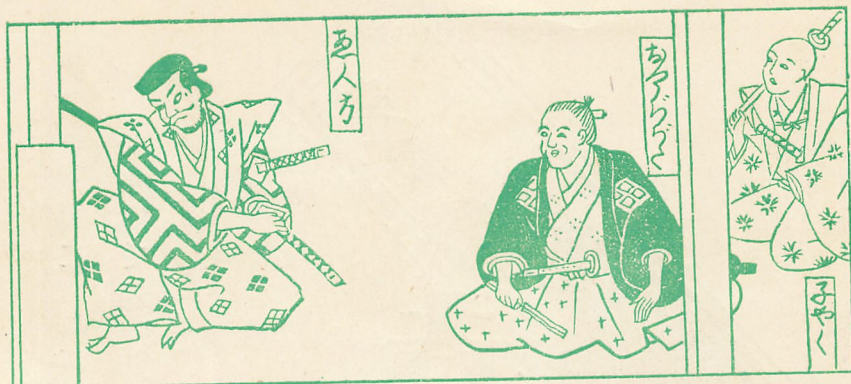


道頓堀戎ばし北詰

支店

大阪支店 北新地裏町  
京都支店 木屋町ドングリ橋





昭和二年七月一日發行

道 頓 堀

第十一輯・七月號

口 ◇浪花座の七月 「猪八戒」猿之助の猪八戒と八百藏の孫悟空と小太夫の沙  
 繪 悟淨◇猿之助の猪八戒◇「研辰の討たれ」市川猿之助の守山辰次◇中座の七月  
 寫 會我廼家五郎劇「當り圍」五郎の尾張屋五兵衛◇「翡翠」五郎の石工重吉と蝶  
 眞 六の九十と大磯の政菊

演劇日誌抄

土田杏村 二

思ひ出の虫干し

山本修二 四

時代喜劇の發生

豊岡佐一郎 七

だんだら幕 (短歌)

木村富子 二〇

文樂再興私見

大西利夫 三

續榮三と文五郎

京極利行 四

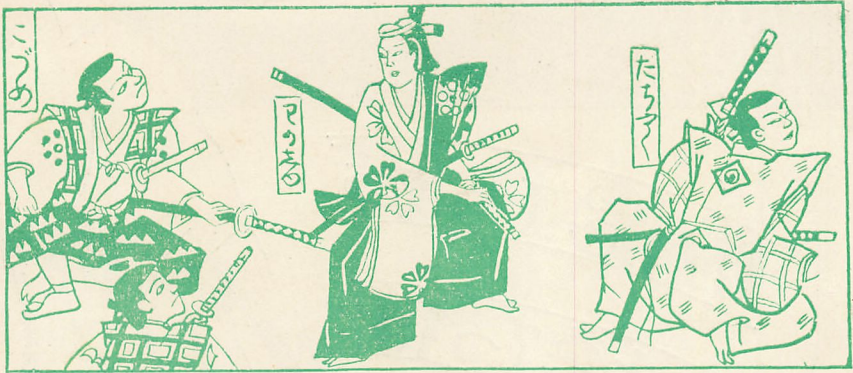
「研辰」趣味と猿之助

楠田敏郎 六

猪 八 戒 (芝居見たまゝ)

素本宗一 一九





岐路に立つ新聲劇

津村京村二四

東京劇信

吉田暎二七

演劇雜感

小菅一夫三〇

次郎吉旅枕 (芝居物語)

福隅一孝三三

新町演舞場六月興行所感

綿貫六助三六

道頓堀雜考

寺川信三

喫煙室

高橋蓼雨三九

浪花座七月興行上演

脚本 研辰の討たれ

五幕

木村錦花四

□浪花座七月興行役割一覧

□話者俱樂部

□編輯後記

□表紙

姥谷生

大塚克三

買つて徳用  
使つて喜び

お近くの酒醬油店にて御買上げを！

丸金醬油株式會社  
さぬき小豆島





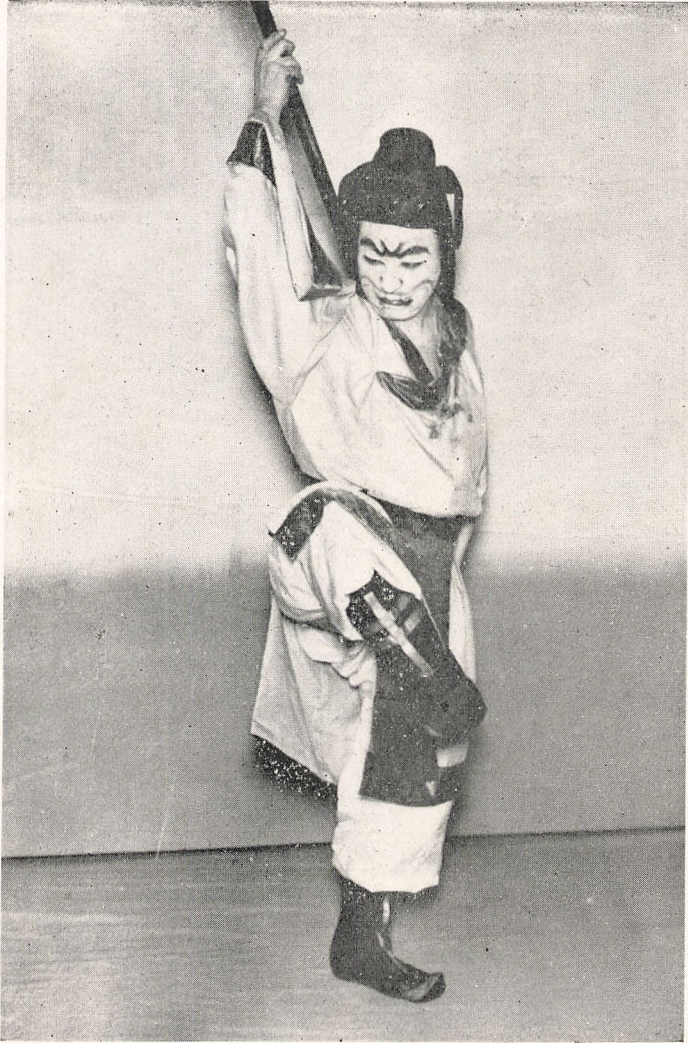


團 鬼 太 郎 作 猪 八 戒 三 勇

猿 助 之 猪 八 戒 和 孫 悟 空 和 小 太 夫 之 沙 悟 淨

浪 花 座 之 七 月





巻三 戒八猪 作兵衛太鬼岡

戒八猪の助之猿川市

月七の座花浪





幕五 れた討の辰研 作氏花錦村木

次辰山守の助之猿川市

月七の座花浪





藝五 れた討の辰研 作氏花錦村木

次辰山守の助之猿川市

月七の座花浪





第三 當り 閣 二 地

曾我廼家五郎の尾張屋五兵衛

中 座 の 七 月





第 二 翠 翡 二 第

菊政妓藝の磯大と十丸の六蝶と吉重工石の郎五

月 七 の 座 中

# 貸衣裳

小道具  
小切



## 松竹衣裳部

本店

大阪市南區久左衛門町八番地

電話 南 四七一八番

東京支店

東京市淺草區並木町十五番地

電話 淺草 五五九九番

素人演藝會 春秋溫習會  
宴會の催物 婚禮の衣裳

其他一般の衣裳を多少に拘らず御利用下さい  
御來客の御相談に應じ御便利よく取計ます



アフリカの曠原に

原始時代を繼承せるロツグハウス

そのまゝの趣味と感じを出せる  
モカのコーヒの和やかな

愛のまどひの

モカで有名な  
喫茶店

ロツグハウス

—洋酒其他の飲物完備—

高津郵便局東

電話  
南四二四四番

山崎寫真館

優秀の技術と迅速が當館の有  
つ唯一の誇りです。  
御散索の折にせひ御立寄りを。

涼味豊かに……

すつかりいゝ氣持になつたお芝居氣分に  
ピタツと適つた自慢の献立……ぜひ御會食を。



梅園

お芝居の

幕間

お歸りには

お芝居での御食事は食堂にて  
おかへりには白鷹にて一寸おぶく江戸すしを

中座食堂

本店 大左衛門橋北一丁目  
電話南六二二七番

新緑の候 潑漉たる

お姿を……………中座三階の

電光寫真……………にて

印象深き一葉に

あなたの微笑と輝きが溢れてゐます。

粹と趣味……………

きつとあなたの御氣に召す

芝居好みの  
人形玩具

中座賣店の

利久堂



# スキナ脂取紙

あぶら

若葉風薫る初夏の候

肌は汗ばみ顔に脂の浮く時

お手ばなしの出来ぬあぶら取紙!

今人氣の集中せる『スキナ』

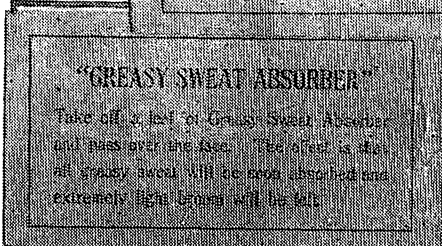
あなたのスキナあぶら取紙は

道頓堀各座の賣店及化粧品店にあり

御愛用を願ひます



現品縮圖  
スキナあぶら取紙



本 舗  
ス キ ナ 十 屋 號  
中 田 大  
商 阪 店

會旗優勝旗

神戸市楠社西門

劇場幕幟

梅原商店

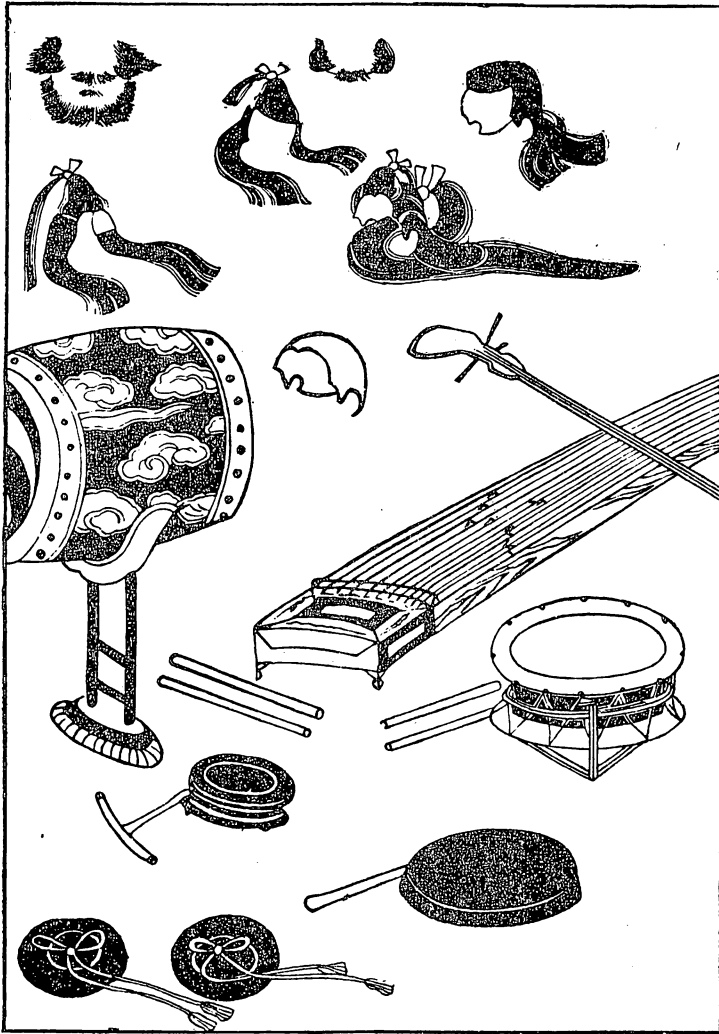
緞帳フラーフ

電話元町一六一五番

誌 雜・究 研 劇 演・刊 月

# 堀 頓 道

輯 一 十 第・號 月 七



リョ「しくづ繪者役」





# 演劇日誌抄

土田杏村

五月九日 南座で吉右衛門を見ました。昨年の三月以來見た吉右衛門です。

黙阿彌の『河内山』を吉右衛門がどんな風に生かすか、私にも可成りの研究題目でした。吉右衛門は既に大正四年頃から幾度も河内山をやつて来て居る様ですが、關西在住者の私としては今日まで全くそれを観る機会がありませんでした。

吉右衛門は黙阿彌の脚本原作を大分變へてやつて居るので私は先づ興味を以て其の變へられた演出を觀て行きました。吉右衛門だけがあゝいふ風に原作を變更するのかそれともすべて現在やつて居る『河内山』はあゝいふ風に變更せられて居るのか、さうした事に就いて私は全然準備知識を持つて居

ませんが、併しその變更の個所がいかにも吉右衛門らしいのでやはり吉右衛門の變更、といふよりは吉右衛門の解釋では無いかと思ひました。そして若しも吉右衛門があゝいふ風に變更して演出するのだとすれば、吉右衛門はいかにもよく自分の持つて居るものを生かす様に原作を解釋して『河内山』を演出して居ると思ひました。

併し勢ひ黙阿彌が自らの腦裏に描いて居た河内山と吉右衛門の解釋した河内山とは、其の性格も大分に違つて居ることを否定出来ません。吉右衛門のやつて居る河内山は、よほどよく心の中で考慮する、善惡の意識もはつきりした、悲劇的性格の河内山です。黙阿彌の心の中に描いて居た河内山はそれではありません。黙阿彌の河内山はもつと樂天的な、善惡

の判別についてもそれ程深刻で無い、仕事をすることに大ざつばな、苦勞性の少ない、どちらかといふと大分の稚氣をまじへた人物です。默阿彌の作品の中には始終かうした人物が出て來ます。そしてそれがいかにも江戸ツ子らしいのです。松江家上屋敷の場での河内山には見えざる時の大仰さが吉右衛門にはありませんでした。けれども原作の感じでは、大仰さが樂天的な、一方から見れば稚氣満々たるところがある様です。それが觀客には面白い印象を與へるところだと思ひます併し前にもいつた様に私は吉右衛門の解釋や努力を大いに買つて居る積もりです。數馬が目錄を持つて出てさて下手へ這入つた以後の河内山などには、いかにも吉右衛門らしい行き方の腹藝の解釋があると思ひました。

玄關先の場での河内山は一層原作と感じが違つて居ました科白も大分變へられて居ます。黒子を見破られた後の河内山は、吉右衛門では一時ひどく威勢をくじかれて狼狽いたしますが原作ではさうなつて居ません。もつとくつとほけた、樂天的な河内山になつて居ります。これはどうも原作の感じの方が面白い様に思ひます。それ程のとほけた、ふてくつしいところが無ければ、あつた計略をぐんぐんとやり除ける事は出來ないでせう。吉右衛門の河内山は、やはり吉右衛門自

身がさうである様に、何處から何處まで心にすきの無い河内山でありました。

X

六月二日 『近代劇全集』の配本を受けたので早速はじめから讀んで見ました。演劇のためにこんなよい叢書の出でくれたのは嬉しい事です。

ルノルマンの『時は夢なり』を讀んで私はルノルマンの教養の深いのにすつかり驚嘆させられて了りました。これはよほどの準備のある人でなければ書ける劇ではありません。彼には確かにライブニツツからベルグソンに至る間の佛蘭西哲學の教養があるのです。それから新しい科學の知識や、アインスタインの相對性原理についての理解があるのです。それ等が渾成してこの一篇の精神をつくつて居ることがよく分かります。それにつけても思ふのは我國の劇作家の教養です。文學書だけ讀んで居ても深い劇は書けるものでありません。もつとくついろいろの視角から人生を眺めるのでなければ、其の書く劇は單調になつて仕方が無いでせう。またその作家の書く位の人生觀なら、觀客も亦よく知つて居るもののだといふ事になつて、作家の心の深さは何處からも感じられなくなるでせう。ルノルマンを讀んで私は深く反省させられました。



# 思ひ出の虫干し

山 本 修 二

虫ほしにしては少し季節が合はないが、先日ある必要があつて、古い書類を掻き別けてゐると、一冊のアルバムが現はれて来た。このアルバムは大約明治二十年頃から同三十五年頃に至る關西古名優の寫真である。無論中には團、菊、左のやうな東京役者の例外もあるが、延若、仲助、璃寛、壽三郎あたりから始まつて、齋人、梅玉、霞仙、玉七あたりで終つてゐる。これを蒐めた苦心談などは、一篇のコントをなすかも知れないが、そんなところは抜きにして、とにかくこれはわれながら珍品だと思つてゐる。東京役者の寫真などは、いくらあるかも知れないが、どういふものか關西の劇通は、保存在興味を持たないので、あの頃の演劇史は勿論、こんな手札形の寫真だつて、今ごろはどれだけ残つてゐるか、誠に心

細い次第である。

それから思付いた譯ではないが、生れて未だ三十四年無論古いところは知らないが、自分の見た名優の印象を手當り次第に書き撲る。これもいはゞ古い思ひ出の虫干しである。

私が最初に見た名優は右團次―のち齋入である。何でも私はまだ五歳くらゐのことだから、ハツキリとした記憶はないが、出し物は『忠臣藏』故團藏の師直を向うへ廻して、大星由良之助、それからお得意の五段目の早變りである。由良之助の方は餘り印象に残らないが、早變りの定九郎は、財布の金を算へるところで、物凄笑い笑を洩らしたのが、今に至つて忘れられない私の貧しい感じからいへば、齋入といふ人は、早變りなどのケレンの外に、不思議な凍味を持つ人だつた。



後年に見た對決の仁木なども、例の印形を捺すところなど、鬼氣人に迫るものがあつた。それから引退の『關寺小町』で舞の新鮮かに舞ひおさめて、薄尾花の茂る草庵の中で、頭を下けた一瞬も忘れぬ舞臺面だ。

橘三郎といふ人、これも充分な記憶はないが、若い頃に張りのあつた眼も、私の見た頃はショボつてゐた『すしや』の彌左衛門になつて、向う鉢巻で花道へとびこむが、梶原に出喰はすと、忽ち威勢におされながら、やはり昂然とした意氣を失はぬところ、あんな立派な彌左衛門をその後見たことがない。

少し品物は落ちるが市十郎のち眼玉も度々見た。あの堂々とした體格と、思ひ切つて大きい眼、總兼ねるといつた多見藏を思ひださせるものがあると、古老の言に聞いたが、いかさまあれは當代の珍品だつた。五右衛門、熊谷、頓兵衛などいろ／＼見た中で、一番いゝと思つたのは『いざり』の筆助の何ともいへない愛嬌と舌ツ足らずの口跡だつた。今時の筆助とは違つて、もつと下卑てるて、もつと大味なものであつた。

少し新しいが璃かくといふ人も度々見た『藝の虫』といはれるだけあつて、少しもソツのない人だつたが『奴の小萬』

といふ愚劇で、人殺しのあとを通りかゝり、提灯を舞臺にふりかざしなから、『エライ血やなア』といつた簡單な言葉に、無限の情趣を含んでゐた。また勘平の母おかやになつて、勘平に武者振りついて門口へ出で、二人侍の姿を見ると、急に尻込みして退場するところなども、彼の至藝の一つであつた。

もう少し下つて璃寛といふ役者も、若い頃の人氣から見ると、聊か龍頭蛇尾だつたが、私などは、彼の晩年から滲み出す一種の滋味とでもいふものに、心を惹かれたものだつた。『良辨杉』の老女役などを見てゐると、仁左衛門と同じ方向をとり、しかもあれよりも、もつと嫌味のないものが、出来るはずであつた。あの變な臺詞辯には聊か閉口したこともあるが、もつと光るべき役者であつた。

梅玉、多見之助となると、餘り話が新らしすぎる。たゞ前に云つたアルバムの中に、先代霞仙の寫眞が、七八枚も這入つてゐるが、あの人を見なかつたのは惜しいと思ふ。彼の歿年を繰つて見ると、私も見てゐるはずなのだが、残念ながら見てゐない。彼の寫眞の中でも、何の狂言か知らないが、大星力彌に扮したものなど、スツキリとした立姿、それに漲る衆道的の色氣、確かに有難いものである。私は誰かその道の

人に、先代霞仙のことなど、もつと詳しく聞きたいのだが、未だに素志を果さない。まづそれまでは、今の霞仙で間に合はせる。今の霞仙も、きつと先代のいゝ所を受け傳へてゐるはずである。若女形の少ない今となつては、もつと認められ

ていゝ人だ。  
こんな風に書出しては、どこまで續くか解らないから、こゝで一先づ打切りとする。餘り虫干などをやると、襤褸が出来るものでもない。

### 人情劇の若手連が

## 新派を正道に戻せよ

眞砂座時代を再現せん  
辨天座に新組織の梅島

七月の道頓堀に新組織され辨天座で第一回公演を爲す、人情劇一派はいよゝ七月一日初日。狂言は第一『本當の人情はこれだよ』八場、第二蠻界氣分『胡蝶蘭』二場に決定し出演俳優左の如し  
梅島昇、松本泰輔、潮川銀潮、堀内茂、森田肇、齋藤紫香、近藤英太郎、井上三郎、安原國越、川浪一策、竹田幾三郎、大山彦雄、荒尾誠一、満喜馬司、俵堂高、高田亘、東愛子、福岡君子、衣川るり子、吉横和子、河合園子、松谷實子、丘なをみ、濱地良子、如月武子、川上喜佐子  
一般新派の巨頭伊井河合連が『新派の將來』に就いて滅亡論を唱へ、次の時代は新派の俳優が自由俳優として更生するやうに話した

事に梅島は大いに反對の意見をもつてゐるとして、此度新組織の挨拶に代へて左の如く語る。  
新派不振も久しいものです。然しそれは新派が振はなくなつたのではなく、自ら邪道に踏み迷つたからなんです、明治劇壇の一現象として新派といふものが生れ、幾多の先輩が努力して兎に角一時は歌舞伎を壓倒させた程の全盛を極めたちやありませんが、第一に舞臺上の工夫がその後閑却され、徒らに寫實に囚はれた弊もありませうが要は新派がその精神を忘れて赤化したからです、日本の人情をグツと掴んでそれを見せて來た新派が、爾來人情よりもやゝともすれば理屈に走つたから不可ないのです。私共は人情劇一派の組織と共に新派は滅びるなんて弱音は吐かず新派も正道に戻す意氣込みで大いに俗受けもし、また勸善懲惡も見せるといふ興味中心のシンと面白い芝居をするつもりです。その昔の眞砂座（東京新派の初期時代に人氣のあつた劇場）當時の芝居をするつもりです。第一の『本當の人情はこれだよ』なんかも高頭と藝者の世界を描いた馬鹿に賑やかなものでず、また第二の『胡蝶蘭』は故高田實先生の當り藝の狂言です。



# 時代喜劇の發生

豊岡佐一郎

我國の國民性から考へて、我國の演劇史上に多くの喜劇を有してゐなければならぬ筈なのに、一向それが見當らないのはどうした事だらう。日本の劇場に於て喜劇的要素を含んだもの、悉くが舞踊劇だと云つてもいい。試みに飯塚友一郎氏の歌舞伎細見を見るがい、その喜劇編の部類に入れられたいものは『靱猿』『膝栗毛』『八笑入』『釣女』『素襖落』『三人袴』『三人片輪』『身替座禪』『棒しばり』等全部が舞踊である。勿論日本には喜劇の方面の藝術(?)として『落語』『狂言』と云ふ完成された表現様式を持つてゐるから、演劇の方面にそれを求める必要はないかも知れない。『落語』『狂言』に極端に發達してつたので、喜劇の世界をその方に一任してつて、歌舞伎劇は敢てその領域を冒さうとはしな

かつたのかも知れない。

とに角日本の演劇は過去に於て喜劇を有する事誠に貧弱である。それが近代に於て喜劇専門の劇團すら生ずるに至つて、演劇史上に立派に喜劇の世界を樹立してつた。併しそれは現代世相喜劇であるが、尙其上に時代喜劇の一項目を加へるにいたつた。これは近世日本演劇史を研究する者に取つて見逃せない重大な題目である。その時代を出来るだけ忠實に研究し、忠實に記述する歴史家がある様に、出来るだけその時代相を重んじ、その時代に呼吸する人物を有るがまゝに描く戯曲家である。これは史劇、時代劇の作家としては常道であり本道である。明治初年、従來の歌舞伎劇、特に時代劇にあきたらず、新しい史劇、時代劇を書かうと試みた作家は正



に此態度の作家である。

處が近世にいたつて、その時代を正しく忠實に見ると云ふよりは、その時代の中に近代精神と共通な何物かがないか、近代的觀察によつてその時代を新しく再現する道はないか、——と強ひてその時代を裏から描かうとする傾向を生じたこれは或意味に於て正しく邪道である。が、物を正しく有りのまゝに受取つては見識にかゝはると思ふのが近代精神であつて見れば仕方がない。

此邪道を行くもの、裏から時代をのぞく者は、自然其處に喜劇的な要素を發見し、その要素をシニカルな見地から描かうとするいかなる時代に於ても、一つの事實を、一つピントをばづつて觀察すると、其處に屹度、よし——それが悲劇的事實であらうとも——何らかの喜劇的要素を發見し得る事は少し氣の利いたものなら、何人にも許される事である。自己の感じたるがまゝに、自己の解釋のまゝに、總ての時代を、總ての様式を融解し、表現せんとするのが、近代式である。尙その上にシニカルな醜味をもつて、いやが上に近代味を出さうと試みるのである。其處に時代喜劇の生れる所以である。

時代喜劇の創始者は誰であるか、今此處に斷定する事は出

來ないが、少なくとも時代喜劇の發生と建設に功を建てた作家とその作品を此處に擧げて見る事は出来る。参考までに順次不同に列擧して見よう。先づ最近最も評判の高かつたのは岡本綺堂氏の『小栗栖の長兵衛』であらう。猿之助をして大いに名を爲さしめたのも此戯曲である。綺堂氏には此外に尙優れた時代喜劇が數篇ある『權三と助十』『能因法師』『筑摩の湯』『江戸名所圖繪』等悉く範とするに足る。それから極く最近に好評を博したものに池田大伍氏の『男達ばかり』がある。その他この作者には徳川時代喜劇集があるが、特に傑出したものに『師直打擲』がある。これなどは時代喜劇中の傑作として三讀するに足るものであり、上演して必ず成功するものだと思ふが、未だに上演されないのは不思議である。松居松翁氏にも多くの時代喜劇があるが、何と云つても、よしそれが雛案であらうとも、『秀吉と淀君』が傑作である。それに次ぐものは『政子と頼朝』『淀君と五右衛門』で、其他のものは、たとへば、『堀河夜討』『大磯小磯』『和田酒盛』の類は少しあくが強すぎて、時代喜劇の好きな私にも、そのまゝでは頂きかねる。林和氏の『三右衛門賣出し』も作爲の跡が見えずに私自身餘り感心しないが、悪いものではない武者小路氏の『或る日の一休』谷崎氏の『お國と五平』等も

見逃さないであらう。若い作家で此方面で傑れてゐるのは田島淳君である。その『能祇』は彼の代表作であり、年代から云つて、時代喜劇の先驅を爲したものでないかと思ふ。

『拾遺大関記』『親鸞』等もいゝ。水木京太氏に『殉死』があるが、それは評判程に私は感心しない。同じ時代喜劇でもどうも私の膚に合はないものである。つまりあくが強いのである。

永田衡吉氏に『蓬萊』と云ふ傑作がある。秦の始皇と徐福の事を書いたものだが、氣品と詩情に富む上演して効果を収める事の出来る作である。同氏の『煩惱無安』は大作ではあるが、これも私にはあくの強い作だ。額田氏には『坊主才右衛門』があるが、テーマが常識的であり、一點不愉快さ

を思はせる點があつていけない。高田保氏の『俠客のデレンマ』『人魂黄表紙』は充分才人の作たる價値を有してゐるがどうも少しとりとめが無すぎ、演出一つで價値の定まる脚本である。田中總一郎氏の『佐平功名録』餘りにたはいな

し。此他に逍遙博士の『大いに笑ふ淀君』坪内士行氏の『山法師』山本有三氏の『本尊』矢島勝吾氏の『旅へ出た雲禪師』猿之助をして再び時代喜劇俳優として名をなさしめた

『研辰の討たれ』——等數へれば限りがない、と云ふ程まだそれ程多くの作を生み出してはゐないが、これだけでは尙多

くの傑作を不用意にオミットしてゐるかも知れない。がいくらにしても近來時代喜劇の世に現はれる事しきりである。小生にもその末席を汚して決して恥かしくない二三の時代喜劇あれど、今後ますます精進して、時代喜劇の興隆に一びの力を添えたいと思つてゐる。同志よ、來れ、である。

### 時代喜劇 藤馬は強い (梗概)

角座に打越す新聲劇一派の二の替は第一行友李風氏作『御金藏奇聞戀疑刃』第二中井泰孝氏脚色『藤馬は強い』を一日初日ですが、この『藤馬は強い』は明るい時代喜劇でその梗概は左の如し

人間の心根は或る時は強くもし又或る時は弱くもするのである。藤馬は日頃から自分は弱いものだと思つてゐたけれども、弟の仙之助は兄と試合をしたならば仙之助が負けるが仙之助は凡ての事にも元氣そのもので相手を負かしてゐた。弟であれだけ強いのでから兄の藤馬はどれだけ強いのだらうと世人がおのゝいてゐたが、肝心の藤馬は自分の力を知らない爲めに日頃ビクビクしてゐた、或る折いよく藤馬の力を試す事件が起つた、藤馬は止むを得ずコッ／＼ながらそれに向つたが、矢張り強かつたのか、弟もかなは無つたのを兄の藤馬は安す／＼と負かしてしまつた、自分ながらも驚いたがらゐであつた、始めて知つた自分の力を……己は矢張り強いのだと天下を取つた様な氣分になる、といふ一風變つた時代喜劇である。

だんだら幕

木村富子

柳かげよき孝次郎の獨吟に舞臺は粹な宵となりぬる

雛壇に灯かけ匂へり伊十郎が品よくうたふ戀の手習ひ

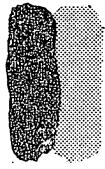
山幕のそとにも走る榮藏のはけしき撥もこゝちよきかな

寒玉の音じめなまめく春の夜をしのぶ文字やり雁なきわたる

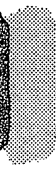
ある時は支那の樂などまじらへて佐吉がすなる絃もなつかし

笛の音は高うひどきぬ揚幕の開くを待つ間の時めき心






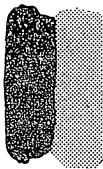
朴清ぼくせいか小鼓こつづみとりてやと打うちてば牡丹ぼたんの花はなもやと散ちるごとし




南無妙なむめうのよきふし胸むねにしみとほり延壽えんじゆ大夫だいふに酔えへるひとまき



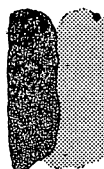
梅吉うめきちの冴さえたる撥はらにすさまじき土橋どばしの雨あめの聞きこえくるかも




はしらだてその萬歲ばんざいの振ふりよりも松尾まつお大夫だいふの節ふしのめでたさ




物ものもひを持たぬものから加賀かが大夫だいふの蘭蝶らんてつきけば泪なみだぐまるゝ



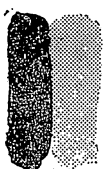
吉田屋よしたやを語かたる大夫たいふが反古ほんこ染ぞめの肩衣かたぎぬ照てらす宵よひのともし火び



行燈あんどうにひとみの入りしうつくしさ此この大切おほせきの吉原遠見よしはらとほみ



樂がくをよそにまる寝ねしてけりくれなるの牡丹ぼたんも匂におひ艶えんなる宵よひを



白鷺しろさぎのふしも涼すずしき青簾あせす越こし河東かとうきく夜よは物ものもひもなし



# 文樂再興私見

大西利夫

私は今松竹合名社に籍を有するものであるが、この小篇は全く個人としての私見である。誤解のないやうに附記して置く。

古い操淨瑠璃の唯一の遺物である文樂座の盛衰に關しては、文樂座が未だ焼けない以前から論議せられてゐたものであるが、昨年劇場が焼失していよく如實にこの問題に當面しなければならなくなつた、世間でも種々議論せられてゐるが、誰もこの古典劇場の再興に異議をさしはさむものはないのは當然のことである。唯問題はこれを再興して如何に保存すべきかといふことである。保存即ち經營、換言すれば收支の辻褄を如何に合はせてゆくかといふことである。

この古典藝術の經營でもつて普通演劇回様に利益をあけ發展を期してゆくことが不可能であることはこれ亦誰も認むる

所ではあるが、さればといつて極めて消極的に、單に保存をするといふ程度の經營すらも出して出来るかどうかは疑問であると思ふ。

これは私の年來の主張であるが、操淨瑠璃は既に過去の藝術である。時代と共に進み或は移りゆくことの出来るやうな藝術ではないのである。かゝる未來のなき藝術は遂に亡びるより外に致し方がないと思ふのである。それは操芝居發達の歴史が立派に物語つてゐる、單なる傀儡の舞が、淨瑠璃の演出俳優の役目をなすに至るまで幾階段かの發達をなしてゐるが、そのゆきついた所は、吉田文三郎の生きたる『人の如き』木偶のつかひ振、竹田出雲の奇才を發揮した女影舞臺である。寛保、延享、寛延の操最盛期に於ては實は操の操た

る本質から外れて純粹演劇の領へ足をふみ入れてゐるのである。さうして將來の衰微への一步は初まつてゐるのである。

操の骨髄は近松築林子が喝破したやうに『歌舞伎の生身の藝』と異る所にある。淨りりはもと音曲であることである。

それがやがて生身の藝とかはらぬ操となり、従つて所謂『音曲』としてのうたふ方面を閉却してかたる方面へ極端な發達を遂げたものが後世の義太夫節である。それは即ち淨りりのメロドラマの本質を棄て、純粹ドラマの領域を侵してゐるものであつて操淨りり存在の意義は遂に失はれたといつても差支ないのである。創立以來五十年六十年の歴史をもつた竹本豊竹の兩座もこの發達の交極——それは即ち最盛期ではあるが——に達すると急轉直上十數年にして早くも退轉の悲運に際會したのは恐らく當然の歸結であつたのではあるまいか。

同じ淨りりが反對の方向に發達したものに常盤津、清元がある。それは『生身の藝』と異る所以を極端に發揮して操を思ひきつてしまひ『音曲』としてのうたふ方面へより多くの發達をとけたもので、同じくメロドラマ的本質から遠かつた點では後世の義太夫節と同じいけれども長眼のやうな單なるうたひ物でなく淨りりとしての獨自の境地を開拓した。従つてそれには存在の意義が立派にあるわけで、今日尙ほ生命を

持續する所以もそこにある。と同時に近時益々淨りりとして語る特色を失ひつゝあり、無意義な常盤津清元の流派的區別さへなくなるやうな傾向を示してゐるのは、當然のことであつて、且つ本質的な生命延長運動とも見られる。従つてこれらのものには尙ほ將來がある。

然るに文樂座の義太夫節に至つては、先にのべた發達完成期の、悪くいへば、操淨りりとしての存在の意義を失はれたものを依然として踏襲してゐるのであつて、かゝる將來なきものが、古典といふ時間的な價値を除いて實際の世間に伍して長く生命を持續してゆくことが出来るかどうかは頗る疑はしいのである。従つて私は、眞の文樂座再興のためには、區別たる興行法の問題はともかく先づ操、及び義太夫節そのものに、本質的な革命を斷行しなければ駄目であると信ずるのである。

然らざれば人爲的な、何れかといへば無理な特別保護を講ずるより外はない、即ち、大阪市とか或は義太夫節禮讀者の手で半公共的に、博物館的に收支を無視した保存法を講ずるのである。自然にすて、置けば恐らく今後十年の生命さへむつかしからうとまで私は憂ひてゐるのである。





# 續 榮三と文五郎

京 極 利 行

榮三君は文樂座生へ抜きに等しい人だ、それだけに、この人は現在の地位に来るまでには、その修行時代に當時の名手であつた玉藏(初、二代兩人)紋十郎(先代)等の間に挾つて、この連中からコツ／＼と仕込まれた人とみるべきであらう、従つてこの人の藝の進歩は一階段々々を手堅く踏み締めて今日の所まで昇つてきた種類のものと云ふべきが至當かも知れない。例へれば九間梯子の一間一間を順に一つづつ上に辿つて来た人で、決つて時には第二の間から一足飛びに第四の間へと、第三の間一つくらは飛び越しても、それで平然として上に辿つて行けたやうな、又事實現在がそんなことをして来て居るのでもあるやうな、決してさうした二つの種類の人ではないらしい。云はゞよい素質を持つた人で、その

素質を努力一つで磨き上げて大物にしたと云ふ感じの持てる人だ。又前記のやうに當時の諸大家の間で絶へず若い時を修行して来ただけに、榮三君の舞臺には何處か控へ目なところと、應揚なところとがある、決して他の連中を押しつけて自分で自分一人を見せやうと出しやばるやうなことはしない。そして斯うした特長が観る人によつて、或は同君を大舞臺だとか、本格育ちとだとか云はせる根本原因でもあるやうだ。

×

大舞臺、本格育ち、そうしたことは暫く云はぬとして、若し初、二代の兩玉藏や初代紋十郎、攝津大椽に先代越路太夫斯うした大家を中心にその他二、三の大家がこれに加つて絶へず活躍し續けて来た明治年代の文樂座を通じて、萬一そう

した長年の間に人形の遣ひ風にも文樂座風と呼べる一傾向が完成されて居るとしたら、その傾向を最も多量に現在に保有して居るものは榮三君の遣し風だと、これだけは斷言してもよいことのやうだ。尙ほこの系統に入るべき人に玉次郎、政龜、玉七、扇太郎諸君がある。この榮三君の遣ひ風を文樂座風と呼ぶとして、これに較べて面白い立ち場にあるのが文五郎君の藝風である。文樂座と對抗して存在を續けて居た一つの人形淨瑠璃の一座Ⅱ彦六座系から後年の近松座系統の一座がそれであるが、この一座の間にも前記の文樂座風の人形の遣ひ方と對抗すべき一種の遣ひ風が完成されたものとなればそして現在に残つて居る事實から推してみると、確かにそうしたものが完成保存されて居たやうであるがⅡその遣ひ風を代表するものが文五郎君の藝風にうかゞへると云へる。尙ほこの系統に小兵吉、當代紋十郎兩君がある。又當代玉松君は先代(三代目)玉藏の直系の人だが、この系統はこの文章では必要外のことでもあるから筆をわざと及ばさぬ事になる

X

これは、前記の文樂座風に對抗したモ一つの別派の遣ひ風を文五郎君の藝風が代表して居ること、は、多少別な問題だが、文五郎君の藝風には次ぎのことも云へるやうだ。元來が

文五郎君や先代玉藏等が中心になつて人形の方で活躍した彦六座系の人形遣連にはよい腕を持ちながら、その腕の眞價程に重用して呉れぬことから起る、一種の先輩横暴に對する不平を持つてこゝに集つた者も多數にあつて、この連中が互ひに各自の腕一つばいの藝を凌ぎあつたやうだ。従つてこの連中の舞臺には活氣はみなぎつては居たもの、ともすれば、シテ、ワキの節を越へてまでも相手を押し退けて自分をだけ見せやうとするの危険も伴ひ易さかつたものらしい。そうした時代の名残か？ 現在の文五郎君の舞臺に、時に興が乗つて呉ると他人の當てどころまで自分のものにしてしまふ場合がないでもない。又腕で鑷を削り合ふ、この事はともすれば觀客に少しでも澤山に聲をかけられて、それによつて自分の方の優越さを自認し又同時に相手にも認むさせやうとしたがる結果をもたらし易い。そうした境遇に藝を磨いてきた所へもつてきて、文五郎君は從來同君の人形の方を、より多く賣物にされての舞臺の方を多數に踏むで來て居る。こうした過去の結果か、現在の文五郎君の舞臺には觀客をすぐに喜ばせる、如何にも花形らしい派手なところや、くひつき易いところがある、そして或はこの花形らしく派手な藝風が或は同君の最長所であるかも知れない。



# 「研辰」趣味と猿之助

楠田敏郎

市川猿之助の舞臺を見るたびに、それからあの人のやつて居る仕事を見るたびに、私は變な同情を持つのである。

木挽町で、だしもの、出来るやうにあつた猿之助だ。淺草へ飛出して、春秋座を組織した時代のやうな、鬱勃たる不平を持つ彼ではもう無いかも知れない。が、見物席の私は、猿之助の舞臺に、影のやうにまつわるもの、あるのを、何うも見る氣がして仕方がないのだ。

誰かも、わが市川猿之助ほど損な立場に置かれた役者はな  
いと云つて居たやうだ。その人は尾上菊五郎と、市川猿之助  
は、同じ「型」にのる役者だと云ふのだ。頭の新らしき、脚

本に對する解釋の正しさ、そして、舞臺の上に燃ゆるやうな熱情を示す點、相共通すると云ふのだ。そして、損なことに、猿之助は總てに於て菊五郎より一まわりだけ型が小さく出来てゐる。菊五郎がなかつたら、猿之助はたしかに現在菊五郎が持つところの位置と人氣を占め得たに相違ない。……と云ふのだつたと記憶する。

私は、この説を、全部は首肯出来ないが、成程、それで猿之助と云ふ人、あんな風にあせつて居るのだとは思へる。

素顔を見ると、色が黒くて、身長低い人物だ。それが、随分損にもなると思ふ。役者の「柄」と云ふことは、その人を舞臺に生かす上に於て重要な役目を持つものだ。

猿之助のあの『柄』は、立役よりも、脇へ廻して重寶がられるものになり易い。

それは、彼を左團次と一緒に舞臺に置くと一番よく解る。左團次の持つ熱、強さ、その緞の太さ。あの身體の巨きさ。したがって實に『柄』にはまつた立役だ。その傍へ、猿之助が同じ型で立つことは不可能である。したがって、猿之助はかなり自分の本質を殺し、脇役らしい演技を見せるの餘義なさである。猿之助の舞臺が、いま一轉期にあるやうに見えるのは、その要求に副はねばならない内心の苦しみから、彼自身、危い分岐點に立つて惱んでゐるのが、さう見へるのだと思ふ。



浪花座で『研長の討たれ』を演るさうである。あの芝居は歌舞伎座、松竹座、本郷座などで、随分好評を博したものである人などは、この劇によつて、猿之助は新しくその生きる道を發見したとさへ云つた。

だが、果して何うであらう。私は、猿之助に逢ふ機會があつたら、そのことに就いて聞きたいと思ふ。

舞臺が成功らしく見へ、看客から喝采を浴びた。それだけ

で、猿之助その人は満足してゐるか何うか。そして、これから先きも、あの方面へ進まうとして居るか何うか。



菊五郎、左團次などに似たものを持つてゐて、それよりも『型』の小さい猿之助であるこの評を、似りに肯定するとすると、まことに猿之助は損な立場である。したがつて、彼は自己の存在をはつきりさせる上に於て、他の大きな自分似た存在となるべくかけはなれたところへ行かねばならない。自分の『柄』にあることを棄て、でも、別なところへ行かねばならない。

その悩みが、猿之助に『研辰の討たれ』のやうなものを演らせるのではないだらうか。



歌舞伎の世界に、新しい解釋から出發した喜劇のないのは、私達もたしかにさびしくおもつてゐる。その不満をおぎなうために、この『研辰の討たれ』のやうな脚本のあるのも面白い。が、猿之助の藝が、あれに向くか何うかは、もう一度考へて見る必要があるやうに私は思ふ。

研辰で當てた猿之助は、本郷座で『正雪の二代目』をやつ



た。これはしかし猿之助の出しものではなく、左團次主演だつたが、猿之助の浪士杉山其作があるために、喜劇らしい味の濃厚に出るものであつた。が、正直に云ふと、私は、苦しくてあの芝居が見て居られなかつた。左團次にしろ、猿之助にしろ、あんな風に使はれるには勿體なさ過ぎる。もつと、彼等の畑が、しかも高い評價を受くべき領分が、他にあるのではないか。……さう云ふ氣がしたのである。



猿之助の『柄』には、刺すやうな皮肉はある。ふてぶてしさ、押し強さはある。だから『血屋敷』の鐵山が痛いほど利く人だ。綺堂もの、『權三と助十』で弟の助八を勧め、さつと人氣をさらつて行ける人だ。でなければ、蝙蝠安がびつたりと板につく人だ。

新作物では、青果氏の『江戸城總攻』で、山岡鐵太郎をやると、その情熱で終に舞臺に泣く人だつた。そこに、わが猿之助の本當の味があらはれ出るのだと私もおもふ。

したがつて、どんなに鷺坂伴内が輕妙に出来ても、それがうまければうまいほど、こちらの胸へ、いたましが来る人である。

だから。

まだ、だからの結論へは行くに早い、紙數に限りがあるから、この邊で『だから』を云つてしまふ。

だから、矢張りわが猿之助は、現在轉化しやうとしての道へ行くのは、損の上の損でありはしないか。と、私はおもふのだ。

自分の近くに、自分より大きく見へるところの、同じやうなもの、あるのは、まさに、邪魔にちがひない。それをよけるためにも、別な世界へ行くのが策を得たものであるかも知れない。

が、それは、たゞ、結局行くべきところへ行くために、骨を折つて廻り道をする結果になりはしないか。

自分の、本當のものでないものを、今日認められるよりも明日、明後日、さらにそれ以後に於て、自分の本然の姿を認められた方がよくなるか。そして、それが正しいのではないか。

頭の好い役者として聞へた猿之助その人にアマチュアの私などが、こんなことを云ふ必要はないかも知れない。が、本當に私はさう思ふのである。

—六月二十一日—



(場一第)

芝居猪八戒  
見たま、

素木宗一

賈氏後苑の場

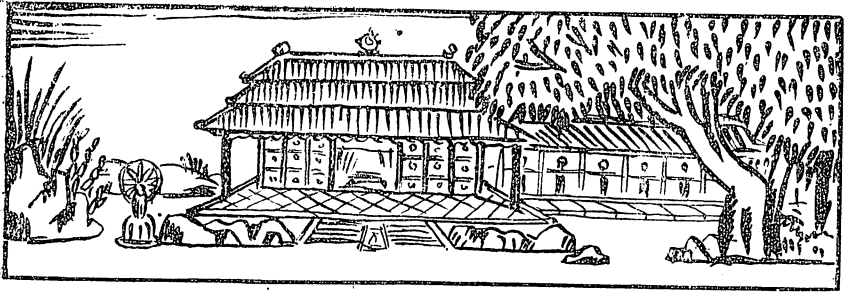
正面の華麗な庭園、岩石のあひだに咲き出でたる嬰児の首ほどもある眞紅の牡丹、大空は紺岩に湧えて漲る光は灼熱だ。舞臺背景は東印度を描いてゐる。所謂えきぞちつくの蘇り芳烈たるものだ。——と、突然、まつたく突然だ。このえきぞちつくに背いて竹本の床になる。

……さるほどに唐僧玄奘三藏學師弟四人は長安の都を出でて日を送り月を重ねて御佛のおはすかたなる西方へ龍馬を供の永の旅……と、これを恰もオペラの序詞のやうに聞いてゐると、綺麗な——それこそ異國情緒派がありがたがつてしまひさうな侍女達——李雨、紅風、松琴、林少がゾロリ、ゾロリと現れて庭の牡丹と紛れながら、昨夜この賈氏の家に泊つた玄奘三藏一行の略をする。太宗皇帝の勅

令を蒙つて道程十萬八千里(聞いただけでも夢のやうだ)はるばる天竺へ法論經を取りに行くやうにやら、いづれ途中の難行苦行のほどが思ひやられる。と科白は無事として段々師弟の顔の悪口に落ちて行つた。孫悟浄はお猿の化物だし沙悟淨は海坊主が還俗姿、猪八戒は耳は大きい、牙は突き出る、猪の顔そっくり……どうも侍女でも何でも女と名のつく人間は口が悪いやうだ。

この容貌探點のさなかへ噂の主、猪八戒(猿之助)が賈氏の姉妹(歌門)の先案内で中の娘(龜松)を右手、末娘(銀之助)に左手と双手に花……どころか三方美形に圍繞しられてゝ、氣に登場する。

「今日からはこの八戒、賈氏の家の主となつて好きな酒の飲み放題、旨いものは食ひ次第……」



(場二第)

どうした譯か仲々以つて良い機嫌で納つて居るので、侍女達は口々にそんなら師の御方に別れてまで何故この館の智君におなりなされる? 『そりや誠のことでござりますか?』

『どうした譯で?』 『ござりまする?』 『ござりまする?』 『ござりまする?』 『まする?』 『する?』 『する?』 『……?』 と頗る華やかで暗ましい

餘り侍女達の唇が踊りすぎるので、やれ、姦ましい』と姉娘眞々から説明する。八戒様が妾たち三人姉妹をお氣に召しての御縁談……それも誰と定まつては残る二人の怨みつらみになる。

『いつそ此の帛で目隠して、誰なと一人捕へたものと母上のおはからひ』 隣々が美しい帛を出して媚態をつくる美事さ!

『三人一緒と所望しても、それはならぬさうな』 猪八戒、仲々怨の深いことを言ふ。

いづれ梅やら李やら眼うつりのする三人の二人を見逃す勿体なさ……三人を見くらべて浮氣な手振、踊ふりが蝶々の羽根の輕さだ。そこで眞々が三人の内誰がその深い縁を契られるか分らねど馴染が浅い昨日今日——『お身の上をつひ一寸……』 愛々も可憐な聲で所

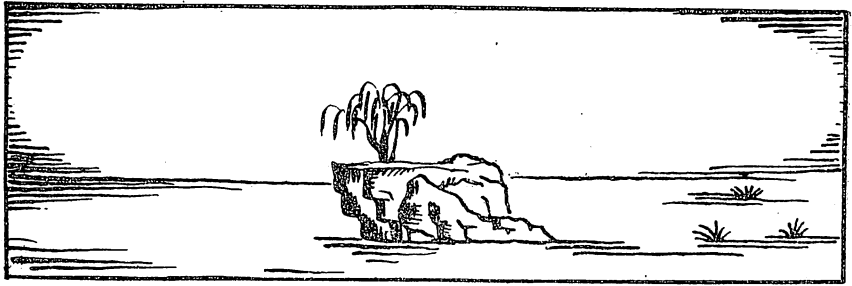
望すると、隣々は『お志のほどだけでもお聞かせなされて下されませ』

『さらばこれより筆入の結納代りの身上を』

……物語らんと身構へたり……と、竹本の太い唄で猪八戒よろしくキツパリ舞臺の眞中へ出て形を定めると、長明離連中の鳴物。

……夫れ普天の下筆士の演、王土ならざる處なけれど、我は元これ天河の管天蓬元帥と言しもの……と、猪八戒は奇妙な面構を漸く猿之助に立ち還つて踊の手を見物を魅惑する踊の姿が如何に巧緻であるかと言ふことを、説明しやうとするなれば……王母の宴の酒の上……の時は左手を恠うした。……嬌娥に戯れ王帝の怒にふれて……は身體を右へ廻して首を恠う、と頗る煩瑣であり又、筆者の如き一介の『見たまゝ屋』が如實に踊の型を、踊さへ碌すッぽ見もしない奴にとつて表現能きものか!

そこで此の猪八戒身上物語の一條の可なり長い所作振は、恠んな面倒臭いモノを讀んで貰ふよりも、それこそ『百聞一見に如かず』と浪花座へ永當々々御見物に罷越して頂けるものと決定して一足飛びにこの踊の濟んだ處



(場三第)

から又進行しやう……。

が、誠にざんねんなら、猪八戒の跡が済むと恰も都々逸の揺返しの如く「恥しながら」と眞々が心意氣を示すべく踊り出さうとしてゐる。……春の浮世は浮世の春は……だ。願

る上調子。長唄ながら艶ッぽくなつてくる。やがて、愛々、憐々の娘達、柔種に胡蝶と如娘の跡へ絡み出す。猪八戒も恚うなると性得跡好きだから黙つて見すごして居られない。

「牡丹花下の睡猫その意いづれにかある」と、さらに、娘三人の跡の輪へ飛び込んで

しまつた。さて踊るほどに踊るほどに、娘恥かし心意氣がそれぞれ通ふ。で、此の上は何うでも目隠しの鬼が捉へ次第と言ふことになつて、猪八戒愈々眼かくしをされて舞臺の眞中へおッぱり出されてしまつた。

「さて、かうなつては孰れを狙つて良いことか。ものは試しこれ眼りだ。片ツ端から拜んで見る」

南無釋迦牟尼佛、南無釋迦牟尼佛、文殊普賢に大勢至、三千揭諦、五百阿羅、金剛大士聖菩薩——。眼かくし帛布で面を包んだまゝ、お先まッ暗の怪しげな手附で猪八戒、殊勝に

拜み始めるの「いよ〜鬼ごとの……」と侍女

の李雨が音頭を取ると「始まり、始まり」と賑やかな手拍子が湧く。長唄のお囃子が肩けず、調子を嵩めると竹本の三味線も劣らじの大陽氣！

「婢君、こちらへ」

「手のなるほうへ」

「お婢さま何處へ、こちらの方へ」と侍女面白がつて手拍子を合せワイワイ囃し立てる

「眞々姉は何處へ行た。中の愛々は何處へ行た」八戒頗る氣が多いから折角眞々の方へ手を差伸べてかけて又ウロウロと迷ふ。「憐々姉は河處へ行た」もそつとで、岩角で頭を

ブツつける處だ。どうもあの足元ぢや及び着ささうにない。舞臺を狭さうに一生涯命手さぐり足さぐりで泳いでゐるうちに、姉妹は三人ながら上手へ逃げて這入つてしまつた。そ

んな事知らないから「眞々嬢さま、此方」と侍女に手を引ツ張られてウロウロ「愛々嬢さま、あつち」と突かれてヒヨロヒヨロ「それ、それ〜」と寄つて蛸つてグルグルと

獨樂のやうに廻されて「ぐるりと廻つて空の方」侍女も八戒を大概小突き廻して置いて遁



げて這入る。到頭、眼が廻つてベタリ！機みに眼隠しが外れた——誰も居ない！

「やあ、やあ、やあ……賈氏の庭園黒雲の渦まく如く、三人の娘も侍女ども、一度に消えしはこは如何に」まだ足元が酔ひたんなばの様にフラフラしてゐるが仲々のことだ。「何にもせよ。おのれ逃してなるものか」と……奥殿さして……と竹本の三重で薄下ロが交ると舞臺が段々暗くなつて道具が廻る。

### 靈感大王廟の場

舞臺面は古びた朱塗の靈廟だ。正面に掲げた額には金文字で「靈感大王之神」と嵩巖に認められて二重屋體の真中には一對の燈臺、點る灯も靜かにまたゝいて神々しい。机の上には香焚く煙が絹糸のやうに棚引いて、豚や羊の生贄が供へてある。とも角、靈廟の靜もる夜深だ。香机の向ふに童女一秤金が薄絹を深く被いで眠つてゐる容子。急にムクムクと動くと被衣が少し取れたし。

「あゝ、夢であつたか。先頃われ猪八戒、賈氏の家に宿りし時……」と述懐になる。童女

は誠は猪八戒が薄絹に姿を隠してゐるのだ。今のは賈氏の花園の夢を見てゐたと言う譯——

三人姉娘を追駈け廻したのは觀音菩薩が自分の道心を確める試しなのだった。處で貧乏の心去らずして師父兄弟の面前に投出されてあの時は大恥を擲いた。その罪の償ひを待つ内の今宵の宿、陳氏の家に妖魔の神を聞く。そこで幼ない生贄を救はん爲悟空を童男關係と化けさせ自分は童女一秤金、斯うして共に供物と化けて居るのである。

「手並は聞き知る小化物、現れ來らばこなたより、眼にも見せん、早や出でよ」頗る元氣がいゝ。怖れ氣のない所を大欠伸で見せて又優しい被衣を被る。すると又靜かになつて香煙と燈火が乍しく搖れるばかり……

と、大陸摩である。  
美しい咽喉と冴えた撥さばきを、少時恍惚と開かねばならぬし  
……すでその夜も更闇けて、闇の中なる山寺の鐘に起るや一陣の、風なまぐさく過ぐると、ひとしく、梢を落つる老松の葉音はさばなみ、さら、さら、さら……

寶冠を頂いて蓮華者の形を執つた銅槌を握つた物凄く靈感大王（猊右衛門）の妖魔がマツと白煙の如く現れる。

「こりや一秤金承れ。今年の今明の祭主は陳澄、陳清が兄弟二人、おのれは兄の娘なれば先づおのれより賞祿せん」  
妖魔は童女を八戒の化けてゐるとは知らな

いから喰つちまはうと言ふ怖ろしい了簡らしい。舌なめずりしてチリチリと顔を覗き込むが、薄絹の中味は八戒だから少しも狼狽へない。「どうぞ快くお召上り下されて、その代り今年も五穀豐饒なるやうお守りなされて下さいませ」可愛らしい娘の聲で怖れ氣もなく言つて退けるので妖魔の方が「ハテ心得ぬと二の足を踏んぢまつた。」

「……おのが姿を——と眼見れば皆伏し轉び物言ふ童もななく、おのれは何の膽を持ち、かくも利へ發の受け答へ——是より二の廟へ赴き歳下の小婢より先づ啖うて呉れん」  
「申し大王さま」  
仲々戻つてゐない。横着にも妖魔の裾を引き留めて相變らざ優しい聲を出す。

「折角此方へお出でになり私を後廻しとは曲がない。どうぞお慈悲に腕なりと、首筋なりと好いところを一口、召上がつて下さりませ」

「やあ、口の減らぬ小びつちよ奴」靈感大王たるもの童女に病びづかされて烈火のやうに怒つた「聖みとあらば頭から、噛み碎いて遣る——観念せよ」

……怒れる面は燈火に照りて裏の色を掛き吐く息ながら炎の如く……三味線がもの凄いい亂調子に唸り立て、大王今にも童女に噛き着かうとする……と、燈明が消えて怪光一閃！ピカリと來たと見ると一秤金の童女姿は忽ち怪物の猪八戒と早替りしてしまふ。

「うむ……さては、おのれも」  
大王、相手が自分と戻らず劣らずの妖怪姿なので眼を白黒させて唸る。

「やあ我こそは玄装三藏が二の弟子、八戒と名づけられたる荒法師。福陵山の雲棧洞に時は妖精と姿を變へしも、菩薩の諭しに善果を得て今は唐僧守護の役、おのれら如きの名もなき妖魔に惜しきものと思へども、日頃

手馴れし九齒の熊手の鉤の金味振舞呉れん」  
「うむ。その唐僧の肉を喰へば長生不死とかねて聞く。イデ此の上は師弟もろとも」

「その舌の根を」  
「何を」

さあ、コトだ。靈感大王と猪八戒、二人ながら劣らぬ怪物、そのもの凄いい出合ひだから火花が散る。廟を飛び下りる、飛び上る。消える、現れる。それこそ自由自在の妖力を具へた二人の立廻りだから眼眩るしいの何のツて劍劇どころの比ではない。頗る人間離れのした珍奇な殺陣とでも言ふべきだ。お互ひに鎧をけずつて争ふうち靈感大王たるもの力及ばずと見て「者共、來れ」と喚くと湧いて出る小怪、その數二十餘——これでは遠の八戒も敵對仕憎い。少しづつ腕が弱り出す、危くなる、アハヤ！と見えると背後から孫悟空（八百藏）と沙悟淨（小太夫）が名乗を擧げて八戒に加勢したので強か者の三人に取巻かれたのだから助からぬ。烈しい立廻りの最中小怪と一緒に散り散りに逃げて這入つてしまつた。

「ウム、消え失せたか」八戒が一と息吐くと「兩弟ぬかな」孫悟空棒を振り廻して力むので「心得だ」とばかり……何處までもと八戒、悟淨、悟空も一度に雲に乗り跡を尋ねて……の竹本で三人の大見得、大ドロが響いて空を見上げると舞臺が又段々暗くなつてゆく

### 通天河の場

舞臺一面大河の水と青空を涼しく塗つた畫布が搖れてゐる。上手から斜に覗きたる大岩石が押出されると、月光と見える蒼白な照明が反映して來た。薄い風音、水の音——

……行く空の遠き淨土も心から、すぐなる道を一筋に歩めばこゝに、目前、南海の觀世音……と竹本が一章、ものものしく唄ふ切れ目で長唄囃子連中の樂の鳴物になつて、觀世音菩薩（閻子）が岩上の柳の蔭に出現したまふと、悟空、八戒、悟淨の三人が續ひて左右に従ひ出る。觀音さまは三藏が師弟の行路の難を救ひ得ますとて、手にした竹籠に金鱗を引揚げて、「如何に三人」となつて、よろしく物語あつて幕となる。



かんぞら

## 岐路に立つ新聲劇

津 村 京 村

この六月の下旬から十月へ掛けて、大阪には馴染みの深い『新聲劇』が、又々道頓堀の角座に開演する。殊にその一番目として拙作『敵討殉情録』が上演されるといふのを機として、雑誌『道頓堀』から、何か新聲劇に就いて書けよとのお手紙に接した。

元來、私が現在の『新聲劇』(即ち中田正造、小笠原茂夫、辻野良一、名越仙左衛門等の人々)と、接近する機縁を得たのは、たしか一昨年(一九二一年)十一月頃、同劇が浪花座に開演するに當つて、矢張り拙作『死の接吻』を上演した事に依つてはじまつたのである。尤もその頃は、前記の人々の他に、山口俊雄君が一枚加つてゐて仲々の全盛を極めてゐたものだ。

『死の接吻』が必ずしも當つたわけではなかつたが、不思議と、それから引き續いて、新聲劇では私のものを幾度か上演した。そしてその都度私と彼等との間には一種友情的な親しみが加つて來たのである。さうした關係から、私は新聲劇そのものに就いては、かなりよく知つてゐるつもりではあるが、さてどうも何か批評めいた事を書かうとなると、仲々おいそれとは行かないものだ。——『惚れた眼で見りやみ、ちやもえくほ——』といふ事があるが、どうも餘り親しい關係になつてしまふと、さうした弊害が伴はない易い様だ。

そこで精々公平な物の言ひ方をするとして、『新聲劇』は、今や正にいろ／＼な意味に於ては大きな岐路に立つてゐる!

それは事實いろ／＼な意味に於いてある。先づ第一に藝術的——と言つて大袈裟すぎたら、演出的と言つてもいゝ。ひと頃、新聲劇と言へば、すぐ一種の劍戟を連想したものである。それは恐らく同劇團を知る誰れもが、さうであつた事だらうと思ふが、私など矢張りさう思つてゐたもの、一人だつた。又實際、ひと頃の新聲劇が舞臺上に演出する劍戟は、文字通りさまざまいそれであつた。きび／＼した點では、同じ様な他の何物もがその追隨を許されない程であつた事も事實だ。

が、元來、新聲劇の幹部に立つてゐる人々が、すべて新劇出、或ひは新派出、の人々で、最初から劍劇それ自身を目的として舞臺に立つた人々ではなかつた。従つて劍劇は演つてゐるもの、その内心に燃えてゐるものは、更に別な藝術的慾求であつたのだ。その慾求の一端を充す爲めの方便としてこれまで時々、最初の開幕劇に、何か新しい作物、そしてより藝術的内容を有つ作物を、極めて眞面目な氣持で演出して來たものだつた。

所でこの藝術的向上の慾求が、その後次第に根強く擴大されて來て、この頃ではどうかすると、その演出される物の全部にまで、さうした慾求が現はれようとしてゐる。例へば

今まで彼等が最も（それは例へ表面的にでも）得意とした劍戟——そして其處に集る新聲劇の一般ファンも又、それを以つて最も見ものとしてゐたに違ひない所の劍戟！ それをも遂ひに今いふ所の藝術的慾求の現はれの中へ包み込まふとしてゐるのである。當然、その舞臺が、謂所劍戟らしい劍戟ではなくて、一歩進んだ、藝術的な劍戟、ともいふ様なものになりつゝあるのである。この現象は勿論、藝術的には非常に結構な事には違ひないのだが、然し、これをひと度び、營業としての興業價值からいつた場合、果してどうであらうか、こゝに一つ大きな過渡期的悩みが存在しはしないかと思はれるのである。で、この際、この悩みを飛破して、更に藝術的に進出への一大飛躍をするか、それとも、いつそ過去に於ける新聲劇の一般ファンを目標として、より素晴らしい劍戟的演出の擴大を試みるか、今や路は正に二つに岐れようとしてゐるのである。

更にこれを一方興業的方面から眺めて見ても、矢張り一つの岐路に立つてゐる事は事實である。つまり前にもいふ通り新聲劇といふものに附いた見物者が、今までの大部分はきびきびとした新聲劇獨特の劍戟を見てよろこぶ人々であつたものが、近來では、更に別な新しい藝術的演出を見る事に依つ



て、新たに新聲劇のファンたらんとしてゐる見物が加つてゐる。かう言へば、それだけ見物の数が増加したばかりの様に思へるが、そこに又當然反對の現象がある事を忘れてはならない。

即ち、劍戟の新聲劇を以つてファンたりし人々には、當然それだけの不満が生じ、又、新しく藝術的演出を期待して集まらんとするファンに取つては、尙いまだ充されざるものがある、といふのが現在の状態でなければならぬ。して見れば、そこに當然、彼等から離れて行くファンの何人かが無いとは言へないだらう。

これが興行的に見ても、新聲劇が矢張り一つの岐路に立つてゐる以所である。

更に俳優個々の演技から言つても、所謂劍劇俳優と言ふものから、もつと深い舞臺藝の俳優へと移り入らうとしてゐる事實が眺められる。で、これを要するに、最初にも言つた様に、新聲劇は、今や全くいろ／＼な意味に於いて、劇團的岐路に立つてゐる事は事實に違ひないのである。だから此處で果して彼等が、いづれの路を撰ぶべきかは、勿論、自分などの容喙すべき立場ではないが、然し、唯一つ『時代は常に動いてゐる』と、いふ事だけは言ふ事が出来る。そして更に、

所謂『劍劇』といふものが、既に全盛期を過ぎつゝ、あるといふ事實をも、書き添へて置く事が出来る。

何は兎もめれ、私は『新聲劇』に大きな期待と、深い親しみを持つ者の一人である。今や大きな岐路に立つて彼等が果してこれから、いづれの方向に向つて飛躍するか、心の鳴りをしづめて待ち望むとしよう。(二、六、二三)

### 角座の新聲劇七月興行

新聲劇一派の二の替り一日初日にて、新狂言第一行友李風氏新作『御金藏奇聞戀寢刃』六場、第二港邦三氏原作中中奉孝氏脚色『藤馬は強い』五場を出す。總配役左の如し

伊賀屋金三郎、和田仙之助(辻野良一)目明し平五郎、劍客宮崎廣太郎(新田吉里)旗本古川又五郎(伊川章二)旗本川越左内、旗本青木模次郎(芝田新)旗本矢島良介、下僕直介(山本之彦)旗本亘辰之助、酔ひどれの老人(一條新三郎)伊賀屋の番頭治郎兵衛、旗本高崎信十郎(鈴木默堂)早旅の吉藏、旗本和田藤馬(中田正造)老僕孫兵衛(名越仙左衛門)丁稚久松(中村政登志)旗本岡倉一平(松村武雄)旗本逸平、劍客佐々木木劍之助(伊田兼美)旗本柴田嘉十郎、同池上欣之進(小波若郎)矢倉澤の駒五郎、旗本關谷春次郎(藤本正雄)旗本駒井藏之助、劍客松本漢人(小笠原茂夫)菅笠のお浪(和歌浦糸子)女中お杉、同お幸(若柳葛子)茶店の女お勤、小松孝子、藝者君菊、澤井光代(待女お直(守住菊子)山)の女お梶、女中お新(吉野静江)小静の母お高、藤馬の母お喜代(中村仲次)藝者小静(富士野葛枝)



大百日

# 東都劇信

吉田 嘆 二

×

此の雜誌にしろ、私の方の『歌舞伎』にしろ、其の月に其の月の芝居の模様がわかる、と云ふ處にミスがあるわけです。従つて、此の『東都劇信』と稱するものも、七月には七月の東京の芝居の模様がわからなければ何にもならない次第です。今是を書いてゐるのは六月の半ば過ぎ。まだ七月の世界ははつきりとしては居りません。本郷座へは吉右衛門、三津五郎、福助の一座で『千本櫻』と『縮屋新助』。菊五郎は久し振で市村座、帝劇は幸四郎、壽美藏補導の女優劇で『劇と評論』所載の池田大伍氏の『海道一夕話』を初め新作をなら

べるさうです。と云つた様な大體の事しかわかつては居ませぬが、これがはつきりわかるのをまつてゐては締切が間に合はず、結局やつぱり一番はつきりとしてゐる歌舞伎座の事について何か申上げる事といたしませう。

×

七月歌舞伎座出勤俳優は、左圖次、羽左衛門、梅幸、それに澤村傳次郎が訥子改名披露の爲めに澤村一門出勤と云ふわけで、宗十郎、源之助が加入、と云ふ大一座であります。そこで狂言は、と云ひますと、時分は七月ではありますし、何

かざりりとした、涼し向きの狂言、それに羽左衛門、梅幸と云ふ、又源之助といふ江戸前俳優の揃ふ事ですから、茲に何か一趣向なければならぬはづです。又左團次、梅幸となる、去年の秋帝劇で好評の南北。一昨年の七月の歌舞伎座での南北。

と云つた工合で、茲に左の如き狂言が選出されたのでせう。

一番目 杜若艶佐野八橋

中幕 大功記十段目

二番目 梅ごよみ

一番目は南北の『杜若艶色紫』を川尻清潭氏が改修されて改題されたものであります。土手のお六と願哲、それに佐野次郎左衛門と八つ橋がからまつての、南北一流の二番目物です。土手のお六には梅幸、願哲には左團次、佐野次郎左衛門には羽左衛門、八つ橋には松蔭、而してお六の亭主傳兵衛には宗十郎と云ふ配役であります。

この狂言の上演は前々から話があつたらしく、活字にての脚本がなるや否や高島家はこれを読んで是非やりたいと心がけて居たものだから、相手に梅幸を得て、思ふぞんぶん南北振りをして活かす事と思はれます。舞臺監督は江戸演劇通、

又南北の研究家として權威ある池田大伍氏、舞臺装置は久保田米齊氏であります。

×

中幕は市川中車の極め付きの光秀、十次郎羽左衛門、初菊宗十郎、久吉左團次、正清傳次郎改め訥子、皐月は源之助、みよは梅幸、正に東西を通じ、これだけの顔の揃つた『尼ヶ崎』はこの七月をにがして、他所には見る事は出来ないだらうと思ひます。一番目、二番目とも世話狂言、中幕でたつぷりと時代物をお眼にかける事となつてゐます。

×

二番目は御存じの人情本の大家、爲永春水原作の『春色梅曆』を木村錦花氏が新に脚色した二番目狂言です。色男と云へば丹次郎の様だと云はれるまでに色男としては代表的な丹次郎は、當代での江戸前美男子羽左衛門がとめます。この丹次郎を取まく藝者は深川根生の辰巳藝者は梅幸吉原で育つた丹次郎故に深川にすみかへして、何かと丹次郎の世話を見てゐる藝者米八は宗十郎、許嫁のお蝶は家橘、千葉の藤兵

衛は中車、千葉の半次郎は訥子、本田次郎が左圍次、大概斯うした顔ぶれであります。

何方も御存じの仇吉米吉の羽織の喧嘩、その意恨での草履打（芝居では駒下駄です。）の件が、この二番目のやまで、それに残月の茶入と云ふ狂言廻しの道具をつかつて面白い一幕ものとなつてゐます。仇吉に味方して米八をいぢめる警者に政次と云ふのがあります。この辰巳の年増藝者を源之助がやつて、源之助黨に十分餽飲を下けさせる事とせう。

この二番目の舞臺監督は永井荷風氏、舞臺装置は鍋木清方畫伯、更に此の二番目の光彩はそへられる事とせう。

×

斯うして、歌舞伎座の七月狂言は、生粹の江戸狂言を二つまでならべた事になつてゐます。江戸文化の爛熟と云ひますか、頽廢と云ひますか、兎に角江戸文化が、いゝ意味にも悪い意味にも、熱し切つた時代、文化、文政、天保へかけての軟文學中での傑作揃ひと云ふわけです。怪奇と淫猥とに於て誰にも知られてゐる四世南北と、纏綿縷々として表面的とは云へ人情の機微（主に男女間の）を描出して、終にその濃厚さは手錠までくゝてしまつた春水、此の二人の作を出す事は

江戸軟文學の一般を示す事にもなりません。一寸面白い狂言の立て方だと思ひます。恐らく七月芝居の白眉でありませう。

×

最後に廣告。

この歌舞伎座江戸芝居の興行を記念するために、雑誌『歌舞伎』の別冊と云ふものが出来ました。全部日本紙で、合巻仕立になつてゐます。又一番目狂言の錦繪が寫眞版で敷葉。原色版で三枚續の國貞の芝居繪が、殆ど原寸に近い大きさで入つてゐます。又梅曆の草履打ちの場面も、二頁大の大きさで入つてゐます。内容は川尻清潭氏、木村錦花氏の解説、尾崎久彌氏の『梅曆』についての研究、一番目二番目の筋書始め、雑誌『南北漫談』一番目書下ろし當時の評判』等が輯められてゐます。繪本として見て面白く西洋式の本ばかりの間に獨りこの別冊のみ日本式である事も雑誌界で注目すべきものと思ひます。

妙な劇信ですが、實は、この別冊やら、定期の七月號やら『歌舞伎研究』やらで、ごつたごたになつてゐるためにやつとこれで先月來の御約束をはなしたわけであります。

一六月二十二日



# 演劇雜感

小菅一夫

## 伊井一派

新派劇は凋落した。そして伊井一派も、やがては解散といふ、悲しい運命の渦にまきこまれてしまふ。——といふことを、わたくしはしばく耳にした。そしてひそかに喜んだ伊井一派の人たち。——その二三の幹部を除けば、あとは因循した、要もない集りだ。いまの一派で、何の充實した芝居を見せることが出来やう。このまゝ行けば、遂には伊井氏まで共に再び立つことの出来ない淵へ落ちこんでしまはなければならぬ。伊井一派は、もう團體としてすでに破産してゐるのだ。——この際伊井氏は、思ひ切つていまの一派を解散しなければいけない。そして新に、二三の腕きゝと、しつかり

した女優を相手に、新派劇のために荒涼たるわびしい路を、一縷の光明をたどつてすゝまなければならぬのだ。もう『よ組の伊三郎』でも『都島原』でもない。

あんなものを演つてゐれば、伊井氏は社會的に葬られてしまふ。

詮ずるところ伊井氏は、泉鏡花氏あたりのものをえらぶのが、一番いゝ方法だと思ふ。泉氏のもは『よ組の伊三郎』や『都島原』のエレメントを含んでゐて、しかも近代的内容を持つてゐるから。——

枯野

世間の見巧者とか、劇評家とかいはれる手合が、よく新派



の人たちの藝は枯れてゐるといふ。——枯野の景色は、まことに結構なものだ。しかし枯野は、春になれば嫩芽を持ち、美しい花が咲く、して見ると、その人たちの藝の枯れてゐるといふことは、死んでゐるといふことになる。

## 偶 感

羽二重をよく合はす役者は、人間的にも、どこか几帳面なところがある。

## 演出者と役者

わたしは『芝居』の仕事をするやうになつてから、どんな脚本でも、演出者と役者とがたしかだつたら、その芝居はどうにかなるといふことがはつきり分つた。

## 味

海苔の味、——水の味、——あゝいふ味を持つてゐる役者が幾人ゐるだらう。

## 『鳴子』

芝居で、わたしは『鳴子』といふ言葉を聞いてゐた。それ

は舞臺が柵なしで廻る場合、鳴子の糸を引いて『奈落』へ合圖をすることをいふのだ。歌舞伎の傳統的な色彩が残つて何となく可憐しい。

## ある役者へ 一

臺詞は自分でいふべきだ。観客に聞かせるものではない。

## ある役者へ 二

ワキ役者は、あくまでワキ役者だ。ワキがあつてのシテ。——それが見とめられて、次第に地位がよくなると、自惚れたり、煽てられたりして『出し物』をするやうになる。そして見事に失敗する。おたがひに心掛けなければならないことである。

## 訛

訛ぐらゐる舞臺の氣分を破壊するものはない。けれどわたしは、井上正夫の訛はすきだ。井上の訛には、哀しい音樂的なリズムがあるから。(大阪にて)

林和氏作  
次郎吉旅枕 二幕

福田 一 孝

シンと立てこもつた静かな空気を破つて、  
單調な馬蹄の響と、高く低く流れる馬子の歌  
ふ、唄が、鞭の伴奏に、向ふの空を、二重に  
も三重にも響き渡る。

甲州路の駒木野から、小佛峠に、かゝろう  
とする道路、左に木立を越して古びた辻堂が  
あつた。その向ふ千仞の谷である。

曇つた七つ下りの空合で、今にも白いもの  
が落ちて来さうである。

『もうし、もうし、旅のお方、一寸お待ちな  
すつて下さいまし』

必死になつて、商人風の旅の男の跡を追か  
けて来て、やつとこゝで追ひついた、清七と

お千代は、こう云つて纏つた。  
『蒼蠅せいな、何か用か?』

旅の男から、から訊ねられるのも、つれな

かつた。怒りと云ふ心よりも口惜涙がハラハ  
ラと流れた。

『何を云ふにも旅馴れない私達。これから甲  
府まで落ちて行くのに……いゝえ落ちつく  
先にも金が頼りの大切な金、どうぞ返して下  
さいませ』

清七は嘆願した。  
商人風の男は、それに同情しようとはしな  
かつた。それのみか、自分の素性を明して驚  
かさうとした。

『何をほざくのだ、甲州街道、中仙道、行く  
先々を股にかけ、銀蠅の久太といふ巾着切り  
よ、胡麻の蠅のその中で、ヤレ兄イの、銀蠅  
のと、呼ばれるだけ、ちつとは知れた男よ、  
四の五のぬかすぞ承知しねえぞ』

清七は、いま／＼しくなつた。この上は及

ばぬまでも死になつてもと、相手の男の  
懐中に手を入れて金を取り返さうとした。

『何をしやがるのだ!』  
見事に拂ひのけられた。  
それでも、清七とお千代は、その男にか  
つて行つた。

………

暮れて行く空の、落ちた霜にか、清七の顔  
を、ヒヤ／＼と冷した。お千代は、起き上が  
れぬらしい。

最後に、久太にひどく腰を打たれて、のめ  
つたまでは知つてゐる。

銀蠅の久太には力が及ばなかつた、そこに  
二人は仆れてゐたのである。  
清七は四邊を見舞した。

誰もゐない。  
スタ／＼……………

胡麻の久太は、永く掛り合つては事面倒と  
峠の方へ指して走つてゐた。

清七は、身中の痛さを押へて先づお千代  
の體を築じた。そして介抱したのである。

『清七さん、如何しよう／＼』

清七の膝に泣き崩れた。女の一面に込み上げて来るのである。

女に泣かれた清七も途方に暮れた。主人の娘を咬のかして、しかも五十両の大金を持逃げした。その何よりも大切な金を持って行かれた。

旅から旅へ、極どい、誘拐しにも切りぬけて来た、道中つれ合つての詐欺にも、危ぶく切りぬけた。

艱難の旅に旅を重ねた、この旅——

然しこの先金が無うては、どうして見ようもない。

『わたしや、いつそ死んで下さい』

氣の小さい女のお千代は、突きつめた考より出て来ないのである。

『飛んだ事を……それでは親御へ猶更不孝、決して、そんな短氣を起して下さいますな』

お千代の昂奮した氣持を沈める爲には、却つてこんな心にもない事を云はなければならなかつた。

『と云つて何處に身寄り頼りがあるではなし

……………」

金のないのが縁の切れ目、と聞いた事がある、清七は若しかすると、考へ出した。

『お前は今となつて、わしと一緒に死ぬのが厭になつたのかえ』

『いゝえ、なんでそんな事がありませう、ともあらうに甲州路のこんな山奥まで連れ込んで、二人で情死したとあつては、親御の嘆きが思ひ遣られます』

『死んだ姿を親の目につけないのが、思ひ様では不孝の孝、ね、清七さん、死んで下され下され、わたしやそれで思ひ残すことはありませぬ』

清七は、瞬く眼をつむつた。徒らに、止めたとして、その後の事を考へた。

『さうだ死のう、この崖から……』

お千代を思ひのまゝグツと抱きしめた。

お千代は小鳥の様に抱きしめられたまゝにしなだれかゝつた。

死に直面した二人は、この抱擁に依つて、

苦しみは更らになかつた。楽しい天国である

と共に、魂の樂園である。

『人にさとられてはならぬ早う！』  
お千代はせき立てた。清七も氣を取り直した。

『しつかり私に取付いてお出でなさい、まあ世へ行つても、必ず一つちや』

その一言がお千代には何より嬉しかつた。

『南無阿彌陀佛』  
二人は抱き合つて飛び込もうとした瞬間だつた。

清七もお千代も、頭からのめされた様にヒヤリとして、その場にすくんだ。

『おつと待つた！』

後ろから、かう叫ばれたのである。

二人は、邪魔者が来たと思ふと、又飛び込もうとした。

その時は、辻堂の中から、もう二人の處まで来る餘裕はあつた。

次郎吉は二人を兎に角その場に座らせて云つた。

『残らずお堂で聞いておました、何もそんな

氣を狭く持ちなされる事はねえ、高が金包を取られた位ひで死ぬの生きているとは、狂氣の沙汰だ、まあ氣を落ち付けておいでなせえ」  
然し二人は、見のがして殺してくれと願つた。

次郎吉は、兎に角、金をやつて安心させようと思つた。

そしてその五十兩を、二人に渡した。

二人は、

『死んでもこの御恩は忘れませぬ』

と禮を云つた。

それで、その胴巻の中に入つてゐた内容を

訊ねた、治郎吉には考へがあつたからだ。

お千代は、下り藤の紋の付いた手鎧や、肌

身離さず持つてゐた。水天宮のお守や、起誓

文まで、くどくどと話した。

山の風は肌をさす。暮六つの遠寺の鐘、韻

を込めて響き渡らせた。

清七とお千代は、幾度も禮をのべて、見返

り見返り山を下りて行つた。

次郎吉は永く見送つた。

兎伏持の疲れた自分には、のび／＼とした心持ちになつて見たかつた。

あゝして、世を忍ぶ旅でも、晴れて、嬉々として行く二人の後姿が羨しかつた。

鐘の餘韻は淋しい。

次郎吉は踵を返して一散に峠へと登つた。

小佛峠から四里二十六町ほど小戻りした八

王子の旅館屋、徳利龜屋に、次郎吉は、どこ

をどう追ひついたか、銀蠅の久大と二人連で

この宿に着いたのが、小佛峠の一件があつて

から二刻程過ぎた頃だつた。

パチ／＼……。

定十爺が居座裡に焚火を投げ込んで、寒さを暖めた。

次郎吉はだん／＼ほつて来る顔をつるり

となで、話を續けた

『商賣は——織物渡世だ、呉服店だよ、ほん

の小さな新店でございます』

尋ねられた時は少々狼狽の氣味だつたが、

こう切り開いてからほつとした。

定十は、只の人間ではなかつた。昔は酒が好きで、博奕、女と放蕩に身をもち崩し、押がり、ゆすりいやがらせ、あらゆる不正な事をした男だつた。

定十も、この男は只の鼠ではないと睨んだからそれを碎いて出て、身の上話をした。

かうして極道の揚句の果てが亭主のある女と出来合つて、出来た子供を捨兒にした、今

が恰度三十二歳、と、定十は物語りをした時

次郎吉はぎくりとした。

『その時、生れた時の胸緒書、淺草の住人定

十伴次郎吉と記して置きやした』

定十爺はかう附け加へた。

次郎吉は、驚いた。

この場合次郎吉は、親父と知つても晴れて名乗りが出来ないのが口惜かつた。

定十も、それからの話で、自分の情ではな

いかと、疑をはさむ様になつた。

『おい、酒を持つて来ないか、酒を……』

大分舌が擱んでゐたか、聲が大きかつた。

『いやだよ。あの客は』

降りて来た女中はこぼした。  
久太は酔つての醜態である。

この家の娘おしまは、銚子を持つて行かうとしたのを、時は好しとはかつて

「わつしが、その銚子を持つて行つて上げやしよう」

辭するおしまの手より銚子を取つて、次郎吉は二階へ昇つて行つた。

次郎吉のものがしを先刻から注意してゐたおしまは下から次郎吉の後姿を見送つてゐた奇な後姿の爲でない。

その男が珍らしいのでもない。  
この娘の心を、次郎吉が持つて行つたのである。

夜廻りの木の音は、冴へてゐる。その他には何の雑音もない、巷は猶ほ夜の沈黙に守られてゐる。

突如沈黙の黒い幕はピリ／＼と裂かれた。  
次郎吉と久太の争ひは、この旅籠を争亂の巷と化さしめた。

次郎吉は、宿の主人や、大勢の客の中で立派に峠の二人からの胴巻を久太から取り返し

た。  
久太は高手小手に縛られた。  
それでも、彼れは自分の素性で驚かす事を忘れなかつた。

「甲州街道、中仙道、行く先々を股にかけ、銀蠅の久太と云ふ巾着切りよ、胡麻の蠅だよ」

然しこの場合、峠の様に効果はなかつた。  
却つて罵倒した。

「この野郎の爲に峠が淋れて行くのだ」  
となぐつた。次郎吉も出立にはまだ間のある事、人の勸めで一先づ眠る事にした。

次郎吉が居ないと見ると、今度高飛車に出た。  
『やい俺を誰だと思つてゐやがる、先刻云つたのは皆嘘だ、俺は鼠小僧の次郎吉だ、去年の春から、此の暮へかけて、街道筋に夜盗火附の風説が絶えぬのは皆俺の仕業だ』

くど／＼と効能書をならべた。  
今度は効果があるらしい。人々は鼠小僧と聞いて、後じりをした。

久太は此處だと思つた。そして益々吹き立

てた。遂に俺の繩を解けと來た。

この争然としてゐる内に二番鶏が刻を告げた。  
次郎吉は心を許して寝てゐられなかつた。

二番鶏が刻を告ると出發の用意をした。定十爺は、この客に何か引きつけられる魅力のあるのを感じた。そして何彼と用意をしてくれた。娘のおしまも、酷く好意を見せて用意をした。

トン／＼……………  
時ならぬ訪れ客である。表の戸を叩いた、定十も、次郎吉もギョツとして顔見合せた。

定十は、次郎吉に目で知らせた。次郎吉は無言でうなづいた。

おしまは戸を開けた。  
次郎吉を探す役人だつたのである。

「次郎吉は居らぬか、御用だ」  
定十は、久太を指さした。

役人は久太を次郎吉だと思つた、そして細を打つた。

次郎吉は表にそつと出た。  
おしまは馳け寄つた。そして笠を名残り惜しうにして顔のみつめた。



# 新橋演舞場六月興行所感

## 綿 貫 六 助

プロ派が、アル派と目せられるものを悪評する如く、新劇の人が舊劇を悪評する如く、批評と云ふものが、その立場からのみ臭氣のやうに吐き出されたら、かなり愚なものになり見つともない事でもある。

そもくから云ふ無理解な批評から、東京では創作の月評がかげをひそめてしまった。否、批評ではなくて、悪口の叩き合ひであったのだから、かげをひそめやうが、なくならうが、寂しくもなければ、創作は創作で、ひとりで花を咲かしてゐるではないか。

なんと云つても人間の心身の力を盡し、鍛錬に鍛錬を経た上等なものが榮えるのは當然だ。

話は外れるが、都新聞で六月から掲載して

ある河合哲雄氏の月評は讀んで爲めになるものだと思つた。かなり宗教的であり、殊に、シヨーベンハウエルの香氣を感じさせられた

### 二

劇に就ても勿論、人間が長年掛つて築きあげた精巧なものは榮えるにきまつてゐるし、さうななく、三文文士や急造劇の如く滅び易いものではない。

アタマや技倆の貧弱と無産階級などをごたごたに混同するのも大に愚な話である。

### 三

新橋演舞場の六月興行を観た。この月は、菊五郎、吉右衛門、宗十郎の顔合せとあつて初日などは一等席の通路に補助椅子を詰め込んだ程の大入りであつた。

一番目妹春山歸家庭訓一幕、中幕双蝶々曲

輪日記一幕、所作事浅妻船、二番目厄年四幕と云ふ奮闘振りであつた。

### 四

一番目、序幕三輪の里道行の場、時藏の入鹿の妹橋姫は美しくよかつたが、氣品がもう少し欲しかった。菊五郎の烏帽子折求女は人形のやうに美しく、豊麗なノリを見せてゐた。宗十郎のおみわ、道行きから三笠山御殿の場、圓然の藝境をみせてゐた。戀情に燃ゆるやうな娘がよく出てゐた。殊に大勢の肩たちから虐められるあたり、一人取り残されて嫉妬の炎にカツとするところ、沁々藝と云ふものゝ神秘的な魅力を感じさせられた。

吉右衛門の鱈七、キリツとしたうちに、うま味があつた。

この幕では、菊、吉共にまづ齡相當な役だが、宗十郎のは、ぐつと若い小娘で、科も白も、少女の調子の高いところをゆくのだから甚から疲れてしまふだらうなどと思つた。

### 五

中幕「双蝶々曲輪日記」、吉右衛門の濡髪長

五郎、宗十郎の放駒長吉の顔合せはよかつた眞ッ直ぐにダマを担ねる血氣な長吉を宥める長五郎には、同じ相撲仲間でも、年配者らしいうまみがあつた。吉右衛門のはどうもかう云ふ役にうまみを感じさせられる。この兩優の一対は好い繪であつた。

三津五郎の若旦那山崎興五郎、ヒイキ角力の長五郎とほめられて矢鱈に羽織などまで脱いで貰れたりするところがよかつた。

### 六

二番目、厄年、菊五郎の美しい白拍子が、妙技入神の舞ひをみせる。神田明神祭の、セリあげの舞臺の上で恍惚として舞つてゐるが厄年の怪我で、舞臺から落ちてしまふ。美玉が岩上に落ちて碎けるほどのショックを満場に與へるところは有藝である。私のそばにゐた何處かの美しいお婆さんなどは、『はやく幕を曳いたらよからうに、これや大變だ。菊五郎さんが大怪我をしたらう！』と云つた。『否や、これから大黒屋の場になるのでせう？』と云つたが、實は私も『ハテナ？』と思

つたほどであつた。

おたつの大怪我を切ツ掛けに、現代とはかなり懸け離れた氣品のある白拍子の舞ひが、怪我人を扱ふ現代向きの騒ぎになり、大黒屋の臨終の場に展開してゆくのであるが、白拍子が、捨れる舞臺に立場を失つて、凍蝶の如くヒラリと落ちた、その刹那が、こがれつゝ、怪我で死ぬおたつの大黒屋の騒動、その騒動に紛れこんで盗みを働く寺男勘藏(菊五郎)それに絡むお六(多賀之丞)の轉帳、京都四條河原までのびてゆく、その経路や展進に一つの動機を興へて驅使してゐるやうに思はれる。

### 七

總體、この、空氣を出す、と云ふ點が誠によくいつてゐるのに感服した。かう圓熟した役者揃ひでないと出来ないことだと思ふ。

新劇などどこまで來るのには大變であらうまだ、ほんの、模倣時代のやうな感じだ。文壇でも、幾らプロが騒いでも、年功と心力を喰つた玉の如き作品を凌ぐのは六ヶ敷い

如く、劇でもやはりさうである。そこにこそ政治や社會運動などの端すツばものと異つた藝術の領域があるのであらうか。舊劇の方でも新劇にグン／＼手をのばしてゐる左衛次はその筆頭の一人だ。やはり、藝であれば、滅茶苦茶に斬ツツ、はツツ、出鱈目に塗りなすり、書きなぐりて可い筈もなく、各方面、修養と鍛練が大切であらうと思はれる。——完——

### ◆寄 贈 雜 誌

- |               |        |
|---------------|--------|
| 歌舞伎別冊 (七月號)   | 歌舞伎出版部 |
| 劇 (ラヂオ・プレー號)  | 「劇」發行所 |
| 松竹座グラヒツク(七月號) | 松 竹 座  |
| 人間創造 (七月號)    | 石丸梧平氏  |
| 劇と評論 (七月號)    | 歌舞伎出版部 |
| 文藝新報 (會報)     | 雜草宛社   |
| 舞臺評論 (七月號)    | 大阪演劇聯盟 |

角力せんぐみ



# 道頓堀 雑考

寺川 信

道頓堀は高津の梅津川を開鑿したもので、最初に工事着手をしたのは、慶長十七年（西紀一六一二年）即ち三百十七年前に安井成安（市右衛門、道頓）が其弟定清（治兵衛）定吉（九兵衛道卜）及び平野藤次と共に、豊臣氏の許可を得たに始まる、然しながらその竣工は四年後の元和元年十一月のことである。

工事の延引したのは、その間に大阪夏の陣があつて、元和元年四月五月は、大阪は全く戦亂の巷と化したからである。それに、安井道頓は其役に従軍して大阪方の爲に奮戦、遂に陣没してゐる。その年の五月八日の戦に大阪城は落ち豊臣一家は滅びたが、戦後第一次城代として伊勢龜山から榮轉し

て來た、松平下總守忠明（奥平美作守信昌四男、家康の外將）が、失業者の叛亂防止や秩序恢復の應急的社會政策に、離散した町人共を引戻し歸任せしめ、大都大阪の荒廢を防止することに努力したのである。

此時のことを濱松歌國の攝陽落穂集（文化五年刊）卷一に次の如く記してゐる。

『松平下總守どの御知行となりて、北船場南船場二郷に天満の郷の脱力、大阪御陣の時、離散の町人ども御引戻し仰付られ、諸人安堵のおもひをなし、萬世をとほく悦べり、上町東堀までは諸土方御やしきにて、御曲輪の荒地伏見より二百町ほど御引移しにて、今總年寄先祖は、慶

長八年の頃長崎唐物入津御取締の節、長崎、江戸、堺、大阪(京、脱力)の五ヶ所の内、百貫目以上の身體の町人、御選み出し遊され、町方支配仰付られ、元締衆とも相唱へ、御年貢の地子銀取集め、未進を取替遣し、則ち松平下總守どの一、上納致され候よし、町々年寄も元締衆より極められ候、其頃今の嶋の内荒野にて、三津八幡も小宮祠、又三津寺もいたつての小庵にて、東堀より長堀、西横堀、今の道頓堀邊までは、四五十間餘四方をば下總守殿より家建の儀、今の總年寄安井九兵衛先祖へ仰付られ、町割に安井九兵衛致され候、今の道頓堀東堀詰より木津川口まで荒地の所、則安井拜領致され候を、堀て南堀と名付引移され、道頓堀と改めて可申由仰付けられ候」

この九兵衛は前記の道下である、その子孫は代々南組の總年寄を勤め、維新後も明治中葉迄、その後裔が南區長を勤續してゐたことも筆者の記憶にある。

安井氏は元來、土木工業の家であるらしく其先祖は足利一族の澁川滿貞に出で、その子安重が藩州安井郷に住んで安井を姓としたが、三世の孫主計頭定重、二弟定正、定次と共に織田氏に仕へ、石山の戦に河内清川郡久寶寺の居城に定重は戦死して、定次は秀吉に仕へ、その子成安と大阪築城當時

城濠圍鑿工事を監督してゐる。

斯如した経験もあつたので成安(道頓)は河川工事に従つたものと思はれるのである。

## 道頓堀と芝居

大阪三郷芝居櫓の株数は十五で、その内九株迄は道頓堀にあつた、「攝陽奇觀」卷七所載に依れば、立慶町(現今の角座)以東、清津橋迄の間)では伊藤出羽椽、角の芝居、吉左衛門町(現今の戎橋南詰角より千日前角迄の間)では竹本筑後椽芝居、松本名左衛門矢倉の大西の芝居、鹽屋九郎門矢倉の中の芝居、九郎右衛門町に墓頭亦大夫矢倉があり、立慶町の濱側には竹田近江椽、鶴太肥後大椽の二芝居があつた、豊竹越前少椽芝居も立慶町にあつたらしい。

右の内、伊藤出羽椽座は安井道頓當時の創建で元和年中に初まる道頓堀芝居の元祖である。

角の芝居は、道頓堀歌舞伎の始りて慶安年中(西紀一六四八年)東福門院椽御取立御赦免也」とあるから、これも相等舊る歴史を持つてゐる。

中座の矢倉は泉州筑野の北村屋六右衛門の持ちで「日本新永

代藏」にも「攝泉兩國において北村といふ腰籠近年見ること多し、是皆六右衛門より出たる者也」とある程の富豪であつたことは「攝陽奇觀」にも記してゐる。

道頓堀の芝居の繁昌は、開發から五十年も過た「延寶」の頃になると「芦分船」所載の如く

「おさへく／＼よろこびあれや、天下泰平にして、國富民榮へ里の長も萬歳をうたふ、歌舞伎若衆の小歌の聲には、道頓堀江の魚もをどり、引三味線のかはの流れ、さつ／＼たる琴の音には、芝居の軒端、けた梁の塵も動き出ればしひりを切らず見物の、貴賤目はつかしき、四條五條は物の數かは、唐土までも聞えわたり日本橋の、はしのうへ老若男女袖をつらね、くびすをついて、朝にはとうから／＼の、太鼓の音を聞たか聞たかの、狂言盡が初りとやといふやいなやに、昔見し人、爰に來りてべたりと逢たり、扱も其後久しう見なんだ、して上留りには、何をかたるそ、是に説經、そこには舞あり、孔雀鸚鵡に種々の唐鳥、錢はもどりじや、元通くによし、虎がいけとり、竹田がからくり時計の東の砂道石道めぐりありきて、あなたへざらり、こなたへざらりと、遊び戯れしはしかほと、千日寺に立より、足を休めて、そこらの人の爰かしこに集り、をのがさま／＼物がたりするのを聞侍りしに、昔々寛永のはじめつかた、

此里よりも辰巳に當つて久寶寺の安井の何某、平野道頓といひし坊主の、おつとり缺にて、土をうごかしそめしゆへおのづから所の名として道頓堀とせいふ也」

と戯れ小謠にも詠れる殷賑な巷と化したのである。

芝居茶屋の所謂「いろは茶屋」の起源は元祿十二年己卯十一月に、道頓堀立慶町の役高廿八軒、吉右衛門町の廿軒、計四十八軒ある所から、一役に茶屋一軒づつの免許を得て、濱納屋に板敷して床几を出し、降雨や寒暑天候不良の際に、劇場への出入の休憩其他の用を便じたのが始まりで、其後幕末になると其處に妓女を招いて、觀劇後の遊興などが行はれる場所になつたのである。

この四十八軒が家毎に紺染ののれんに、いろはの文字を現したので、時人は「いろは茶屋」と呼んだのである。

## 謹告

本誌の第四輯より第十輯迄は僅少なながら  
残本があります。御望みの方は至急お申  
込みを願ひます。

『道頓堀』編輯部



浪花座の七月興行上演

# 研辰の討たれ

五幕七場

木村錦花

## 人物

研師	守山辰次
家老	平井市郎右衛門
同弟	同九市郎
同	同才次郎
侍	八見傳内
同	宮田新左衛門
同	小平権十郎
同	湯崎幸一郎
同	山田三左衛門
同	吉田三作
同	水田虎十郎
同	高橋三左衛門
粟津の奥方	萩の江

仲間市助	仲間五郎助
番人徳五郎	上手のつな引柿
下手のつな引八	亭主清兵衛
下女お駒	同お市

その他、茶坊主、腰元、仲間、町人  
駕昇、大師参り町人大勢。

### 序幕 粟津城中侍溜りの間の場

平舞臺、侍溜りの間の餘、若侍が大勢詰めてゐる。尤も泰平の御代、別段取り當てゝする程の用向きなし、碁を打つ

たり、茶を立てたり書見をしてゐる者などなる。幕明く。

中央に守山辰次、下手に入見傳内、宮田新左衛門、小平權十郎、下手に湯崎幸一郎、山田三左衛門等居並び其他、高橋三右衛門は書見をして居り、吉田三作、水田虎十郎の兩人は碁を圍んでゐる、宮田新左衛門は茶を立てゝゐると宮田茶を立て終り小平權十郎に向ひ宮田

小平氏、一服如何でござる。

小平 これは忝い近頃は半分御熱心の程あつて、イヤ是れは仲々結構でござつた。

この中守山辰次、小平の茶の服みやうがおかしいので、

守山 フフ……………(と冷笑する)

小平 守山氏、貴殿、何がおかしいのだ。

守山 何がおかしいと云つて、雨蛙が蚊でも呑むやうな恰好をして、お茶を呑んでゐらつしやるから、おかしうございますよ。

小平 無禮な事はおいて貰はう、人の事を兎や角と申すなら、貴殿茶道の心得はあるのか。

宮田 そりや小平氏、如何に守山殿が昨日今日の成り上り者とは言ひながら、侍の仲間入りをしたからには茶の湯位、御存じあるは知れてゐる、それでないで又貴殿の様を見て笑ふわけはない筈だ。  
小平 成程、それなら是非お願ひ申さう、拙者の事を笑

はれたからは、此のまゝではすまされぬ、サア守山氏、早速にお願申さう。

守山 手前、その様な事は、一向に存じませぬ。

宮田 何、知らぬ。(と、態と)イヤ、その様の筈はない、能ある鷹は爪をかくすの譬だ、それは貴殿遠慮をしてゐるのであらう、侍が茶の湯を知らぬ筈はない。

守山 笑談おつしやつちやいけません、そんな事をあなた方に遠慮をして何が徳になります、私は本當に存じませんので……………

小平 何、知らぬ、是れは不思議だ。

守山 ちつとも不思議な事はないぢやありませんか、お茶を呑むに、あんな真似をなさるとは、私の方が餘程不思議でございますよ。

宮田 どうだ各々、守山辰次は、侍でありながら茶道のたしなみがないと申す。

これを湯崎と言ふ侍が引取り。

湯崎 併し宮田氏、守山氏なら、知らぬ方が當然でござる。もとが職人町人上りの俄侍に、茶を所望するのは、貴殿の方が無理でござらう。

高橋と言ふ侍、本から目を離し。

高橋 イヤ、呆れ返つた侍があればあるものだ。  
守山 高橋様、あなたは何かあきれ返るのでございます

ね。

これを山田引取り。

山田 つまり貴殿には侍たるの價値がないと申す事なのだ。

守山、此度は山田の方を振り向き。

守山

山田様、あなたも變な事を仰つしやいますね……ア、分りました。又いつもの様に、私をいぢめるのでムいますな、よろしうムいます、皆様がお心なら、私も黙つちやられません、若し山田様、茶の湯を知らなければ、何故侍でないのですぞいいます。

それを湯崎幸十郎引取り。

湯崎

それはなア守山、町人は算盤、秤りの心得があるのと同じ事、腹からの侍なら、誰しも茶道の心得はある筈、又さう言ふ事を知つて居て、初めて侍の交際も出来ると言ふもの、而しお手前などは、身分の變りが激しかつたのだから、無理はない。

第一其方如きを侍だと思つて居たのが、我等の失策だつた。なう何れも。

皆々

いかにも、その通り。

守山、湯崎の方へ向き直つて、

守山

イヤ、湯崎様、今度はあなたの番でムいますね、何誰でも宜敷うございいます、湯崎様、あなたは全

體、商人を何と思つてゐらつしやいます、金を儲けるのが商人、たとへ算盤、秤は知らなくとも、

金儲けのうまい商人なら宜敷いませう、侍にした處が其の通り、御主に忠義の心得さへあれば御奉公は勤まります、それなのにあなた方は、やれ茶の湯を知らなければ侍でない、やれ劍術を知らなければ侍でないなど、イヤ馬鹿々々しい、まるであなた方は、それでは茶の湯侍、袴侍も同じ事、その上又二タロ目には、身分々と仰しやるのから實のよくないお産れつきだ。

是れにて一同顔を見合せて

小平

何れも、まるで我々とは、住む世界が違ふ、相手にならぬ方がよろしい。

守山

イヤ全く、實がわるい、私がおとなしくしてゐる者を、皆様が、種々な事を言ひ出して敵はなくなる、いつでもそんな事を言つて逃けてしまひな

さる。

此の時、茶坊主、菓子を持つて出る。

坊主

皆様、お奥からの下され物でムります。

皆々

有難うござる。

守山

ハア、是れはどうも、何卒御前へ宜しう御禮をお願申上げます、手前、守山辰次でムいます。畏りました。

坊主這入る。

八見傳内一同を見て

八見 どうだ各々、今のを聞かつしやつたか。

守山 又何か仰つしやるのでございませうか。

八見 貴殿一人に下されたのではないから少しは遠慮をしたらどうだ、よく追従を言ふ奴だ。

守山 追従を？ これは恐れ入りました、只お禮を申上

けた計り、こんな事にまで、皆様に氣兼ねをする  
んで△いますか、面倒臭い世の中でございませうな  
……あ、分つた、八見様、あなた、ひがみでござ  
いますな。

八見 何、ひがみ……。

守山 さうでなければ、お氣にかゝるわけが△いません  
……其様に仰つしやるあなた方だつて瀟更、お  
禮を申したくない事も△いますまい……。

八見 何だと、侍が、そんな卑怯な、まねが出来るもの  
か。

守山 ア、瘦我慢でございませうな、つまらない、あ、  
申しましたのはつまり、手前、戦場で申す一番槍  
も同じです、この位にしなけりやあ、却々世の中  
の荒波は、乗り切つては行かれませぬので……。  
八見 よく、つべこべと、事毎に氣にいらぬ奴、研屋の

職人風情に、侍の作法がわかるものか、各々がお

となしく相手になつてゐればよいかと心得、一人  
で利口振つた口の利きやう、手におへぬ奴だ、其  
方如きは口で言つたのではわかるまい、侍の作法  
が間違つてゐるか、汝の申すことが本當か、サア  
はつきりと申して見ろ。

イキナリ辰次の頭を打つ。

守山 アイタ……何を亂暴をなさいませう。……口で申し  
て居りますものを其様な……。

八見 何……。

守山 まあ、よろしう△いますく。

八見 よろしいでは分らぬ、悪いと思ふたら両手をつい  
て詫びろ、それとも強情を張り通すか。

守山 誰れが強情を張ると申しました。

八見 そんなら、悪かつたと詫びを申せ。

小平 イヤ、侍なら、頭を打たれては両手もつけまい……。

守山 おだてたつて駄目で△いますよ、手前、何時、あ  
やまらぬと申しました、侍といふものはいづん  
氣の早いものだ、何も自分の意地を張つた處で儲  
かるわけでもなし、あやまつたからつて寝つかれ  
ない事もないので△いますから……宜しう△い  
ます、あやまります、すぐあやまります、なん  
もない事で△います。エ、八見様、手前重々の

失禮、平に御容赦下さいまし、……………これでよろしうムいませう。何ならもう一度申し上げませうか、……………これであなたも、いゝ御心持でムいませよ、フン困つた侍だ。

八見 それ、さう云ふ口の下から、馬鹿に致すか。

小平 八見氏、相手にならぬが宜しうムる。

八見 フム……………馬鹿な奴め。

八見、元の席に歸る、山田三左衛門一同に向ひ

山田 モウ、其様な、町人侍には、おかまひなく、一つ

御菓子を頂戴いたさうではござらぬか。

皆々 『左様々々』『頂戴いたさう』

などと皆々云ふ、山田、菓子の蓋をあける、そして隣席の湯崎に向ひ。

八見 湯崎氏、サアお戴きなされ。

湯崎 イヤ、折角だが、拙者、甘いものは好みませぬ。

辰次、是れを聞き。

守山 何、なんでござりますと。

湯崎 何も申しはせぬわえ。

守山 でも、只今、あまいものは……………何とやら仰つし

やいましたな、實に怪しからぬ。

これにて又一同辰次の方を見る。

高橋 エ、又何か言ひ出しおるな(本を見ながら)うる

さい奴め。

八見 某のけんこを忘れたのか守山、イヤ、外の事とは

違ひます、假りにもお奥からの下されものに對して手前は好まぬの嫌ひだのとはそりやおだやかではムいませんな……………。

大音に言ふ。

宮田 藪から棒に、……………又追従が初まつたな。

守山 いや、さつきのとはわけが違ひます、辰次は一生

懸命でずぞ、假りにもお奥からの下されもの、甘いもの一ついたゞくのに、苦い顔をするとはあき

れたものだ、手前なども酒飲みだがお奥からの下

されもの故、二ツや三ツは我慢をする、お手前は

その様の事で御奉公が勤まりますか、こりや重役

に申上げねばなるまい。

湯崎 エ、おのれその様な事を申すと容赦せぬぞ。

此時、下手より家老平井市郎右衛門、

平井 何を聲高に申し居るのぢや。

辰次、市郎右衛門を見て。

守山 オ、これは御家老様、丁度宜い處にお出で下さい

ました。

平井 エ、騒々しい静かにせぬか。

静かには出来ませぬ、斯様でムいます、只今、お

奥からお菓子を頂戴いたせし處。『こんなものは

食へるものか』と仰しやる方がござります。

平井 それは、誰だ。

守山 ハイ、湯崎様でういます、餘の事故只今、私も一寸申してやりましたので。

湯崎

イヤ御家老様、それはちがひます、手前元來、甘きものは好まぬ故、好まぬと申せしまでの事、それを辰次め、その様な云ひが、りを……。

平井

宜しうござる、わかつております、誰も嫌なものは、嫌ひと申せばとて、少しも憚る處はござらぬ併し、それも、お奥よりの、……。

平井

たとへ何であらう共、何の心もなく菓子好まぬと申せしまでの事、それとも湯崎氏がお上で好まぬとでも申したのか。

守山

イヤ、……その、……さうはつきりとは申しませが、……。

平井

それなれば、その様に騒ぐ事はない、第一嫌いなものを好きと申すは、それこそ所謂へつらい侍……ウム……思ふにこれは其方が殿様を引合ひに出して、何かお褒めにでも預かる心組にて左様に騒ぐのだらう。して見ると其方は、勿體なくも殿様を御道具にした様なものだ、不埒千萬な奴、次第によつては此儘には相濟まさぬぞ。

これにて、辰次、急に態度を變へる。

守山

ハ、左様でういますな、元々嫌ひなものでござい

ますからなア、第一、正直で宜しうういますなア

平井

其方そりや何を申すのだ。

守山

(それにはかまわず) 全體、酒呑みに甘いものは全く食はれませんよ。

平井

その様な事はどうでもよい、殿様を笠に着た不埒者の返答を承らう。

守山

イヤ其の儀なれば、打限りに願ひます、拙者の思ひ違ひ、何卒帳消しに願ひます、是れは拙者の負け、眞ツ平御免を。……(皆々苦笑する)

守山

併し御家老様、矢張りあなた様は御偉い御方でございませぬ、惣じて物事の御捌きに手落のない、……いや恐れ入りました……何事も穩便な御計ひ……常日頃、辰次が、逢ふ人毎に、あなた様の事をお褒め申すは、この事、粟津の御家の大黒柱……人の上に立つて……。

平井

モウよい、うるさい奴。

此の時二三人の腰元にかしづかれ、粟津の奥方出る。

一同これを見て、高橋は書見から眼を放し、吉田水田の兩人は碁を打つ手を休める。

皆々

ア、御部屋様。……。

奥方

毎日のつとめ、嘘、大儀であらうのう。

此の時、辰次おつと前へ出で。



守山 これはお部屋様……勿體ない仰せ、御奉公でゐります故、守山辰次一生懸命でゐります。

奥方 お、守山か。

守山 ハア、また先程は結構な下されもの誠に有難……

……イヤ、又この様な事を申上げると、皆様方に、いぢめられます。(辰次、下を向く)

奥方 何、皆がいぢめる。……

守山 イエ、何、これは御部屋様の御耳に入れることで

は御座いせん、何卒御聞き流しにお願ひ申ます  
奥方 其方は大層、しほれてゐるなう何か心が、りの事があらば申して見よ。

守山 左様でゐりますか、では申上げます……御承知

の通り、根が町人の私し故、如何に御奉公に精を出しても、する事、なす事、御朋輩衆の御氣にさからひ、いつものけもの、扱ひに致されます、と

ても、この工合では、手前の命がたまりません、さうなりますれば、勿體ない事ながら御役御免を願はねば、ならぬやうな事になりはせぬかと、……

……それが心が、りでゐいます。

奥方 其方を退け者にする、それは誰がするのぢや。

守山 誰れ彼れと申しまして、皆様がでゐいます、第一

八見様には、手前今日、目のくらむ程、打たれました。

八見 イヤ、御部屋様、恐れながらそれは斯様でございます、餘り辰次が出すぎまして、我々をないがしろに致しますので……

奥方 たとへ、どうあらうとも、城中に於てそのやうな手荒な事はなさぬもの。

八見 御言葉を返し恐れ入りますが、口で申してきく人間ではござりませんので……

守山 大嘘でゐいます、頭から私を馬鹿になさいましてやれ研屋の職人だ、成り上りものだなど、それ程卑しい私なら、殿様の御目がねに預り御奉公申し上げてゐるのが悪い様な氣も致しまする 又、

皆様も、さうと言はねばかりの御口振、第一それは殿様に對し勿體ない事で……

奥方 そち達は、何故、その様に守山を、寄つてたかつて……

宮田 いえ、決して左様な事は……

奥方 でも、守山が、あの様に申して居るではないか、妾には、守山の言ふ事がまこと、思はれるぞ。

小平 是れは恐れ入ります、全體彼れは非常に辯口のうまい人間で。

奥方 では、妾が、守山に欺かれてゐるでも申すのか

小平 イヤ、決して其様な事は……

守山 イヤ、御部屋様、それは私があり、御家のお爲

めを思ひ、身の冥加を考へまして、一生懸命に御奉公いたしまする爲めに、それ追従の、やれ、へつらふのと、それが皆様の御氣にさわるのでムいます、尤も氣の張る溜りの間詰め、四角張つて居りますよりも、茶を立てたり、本を讀んだり、碁でもなすつてゐらつしやる方が氣樂ではムいますから……と申して、皆様に責められますのも實につらふムいます、何卒御推察の程、お願申上げます。

奥方 それは不憫な事ぢや、そちは兎角内氣故、皆に責められるのぢや、古參、新參の別はあれ、妾も、殿様も、そちが好きなのぢや、ちと氣を大きく持つたがよい。

守山 有難うムいます。

市郎右衛門にがり切つて

平井 これ辰次、最前から黙つて居れば御部屋様の御足を止め、朋輩共の讒訴、おのれそれでも追従とは思はぬか。

守山 エ、何と仰しやられても私は、御用が大事でムります。

平井 何を申すのだ……誰が御用が大切でないと申した。

奥方 市郎右衛門、守山は根が町人故、言葉遣ひや行狀

に相違する事がある故、時には、追従とも思はれるのぢやが、氣立は誠によい者ぢや、これ、守山これから皆の者が、又その方に何か申す様な事があつたら妾につけるがよい、悪い様にはせぬ。

守山 有難ふムいます、……それで私も少しはおちつきましてござります。

奥方 市郎右衛門、妾はちと殿様に御用がある故、其方も一緒に來てくれぬか。

平井 畏りました。

守山 御免下さいまし。

奥方は下手へ這入る。平井あとにて

平井 各々(辰次を指さし)其奴には餘りかまわぬ様になされい。

皆々 ハア……。

市郎右衛門、下手へ這入る。

あとにて、皆々、顔を見合せる。

高橋 イヤ、呆れた人間だ、全くいやな奴だ。

守山 それ、その通り、あなた方は……。

八見 黙れ、なんと言ふ白々しい奴だ、あれで立身出世が出来ると思つてゐるとは情けない性根だ。

守山 なんでも宜しうムいますよ、人前やお利口振つて居たのでは、泰平の今日、御加増は思ひもよらぬ事でムいますから……ちとあなた方も、商賣御

熱心におなりなさいませ。

湯淺 そんなことを聞きはせぬ、併し、おのれ、あのやうに我々の讒奏を申すとは許し難い奴だ。

守山 然しこれも、商人が品物を扱つて儲けるのと同じ理屈ではいけませんか。

八見、又席を立つて守山を打つ。

守山 アイタ………

これを宮田とめて。

宮田 八見氏、およしなさい、犬畜生に等しい奴には、おかまひなさるな、又、お奥へ行つて、何か申すと困るから。

八見 何、かまふ事はムらぬ。

小平 まア、およしなさい、とても眞劔勝負を望める奴ではないのだから。

八見、辰次を睨みつけて、自席に歸る。

八見 おのれ、何んとかして、ひどい目に遇はせてやらないでは。………

守山 御勝手になさいませよ。

此時、市郎右衛門下手から出で。

平井 孤め、又何とか申しておるのか。

八見 イヤ、歎の知れない大馬鹿者でムります。

平井市郎右衛門、辰次の側に來り。

平井 是れ守山、今日まで目に餘る事もあれど何事も申

さなかつたが、御部屋様にあれ程の事を申す奴、この後は何を仕出かすか判らぬ、所詮はお家の爲めにもならぬ其方、折を見て殿様に申上げ、望みの通り御役御免を願ふてやるぞ。

辰次、市郎右衛門の顔を見て。

守山

これは御家老様、何もあなたが先きに立つてそんな事を仰しやる事はないではいませんか、あなた様は御家老、私は平侍、どう間違つたからつて太刀打ちの出来やう筈はなし、大人氣ないぢやいませんか。

平井

何を申す、その様な性根故、同輩共にも、うとまれるのぢや、所詮その方如き人間の住める世界ではないのだ、町人なら町人らしく何故世を渡らぬ自分を偽り、世の中を偽つて心苦しとは思はぬかそれで出世が出来ると思ふか、偽つてすむ者は狐狸より外はない筈だ。

守山

又、その様な事を仰しやいますね、手前そんな堅苦しい事は大嫌ひどうあらうと、出世が出来ればよい世の中でいませう、何も私だつて侍の勝手を知らぬと思へばこそ、これまでに、お刀の一本でも只で研いで上げてゐたり、手前の家内までお宅に差し上げ御用をさすは何の爲め、あんまり義理を知らない仰しやり様、これまで暑いにつけ、

寒いにつけ持つて行つた送り物は、どんな御心持で受取つたのでございます、少しは私の身にもなつて下さいませよ。

平井 あきれた奴だ、その様なことを申すからは尙持つて此のまゝには致されぬ、あすにも殿様に申上げねばならぬわい。

守山 御家老様、何故私のいたします事が其様に御氣に入らぬのでムいます、不思議でございますな、手前至つて理屈がましい事は大嫌ひの人間、世の中は臨機應變、例へ何であらうとも、御家の爲をさへ思へば、それで宜しいではムいませんか、なんと言ふ不器用な世の中だ。

平井 己れの事ばかり思ふてゐる其の方が、お家の爲めになると思ふか、茶坊主侍め。……………

八見 茶坊主侍とは、いゝお捌きでゐるな……………イヤ、泰平の御世は有難いものだ、斯様な素町人とも同席せねばならぬとは。

宮田 御家老、祿盗人とは、斯様な奴の事を申すのでムらうな。

山田 よく、これで侍だと言つて大手の門が潜ぐれるものだ。

守山 何でムいますね、山田様お頭をはけらかして、お孫さんのおありなさる方まで一緒になつて、そん

な事を言ふにやア當らないぢやムいませんか。

山田 餘計な事を申すな。

守山 あなたもいゝかけんになさいませよ。

平井 各々、手前が承知故、あすからは茶坊主扱ひにしてやりなさい、所詮は、生をそれで送る奴、それが分相應と申すものだ、早速殿様に申上げて置かねばなるまい。

守山 エ、御家老、どうでもそんな事を仰しやるのでムいますね、これ程手前一生懸命になつてゐるに……………よろしうございます、エ、よろしうムいます……………手前とても根が町人と思へばこそ氣兼苦勞をしてゐるのに、何處まで言つてもその様な事を言つて拙者の出世の邪魔をするなら……………モウ御家老とも申すまい、何が御家老だ……………いゝ年をして融通のきかぬ人間だ、こうと知つたら、進物などをするんではなかつたのに、エ、いまくしい……………

平井 何と云ふ卑しい奴だ、顔を見ても虫唾が走る。

辰次の顔につばを吐きかける。

辰次、口惜しきこなし。

一同苦笑する。九ツの太鼓にて。

—— 幕 ——

## 二幕目 大手馬場先き殺しの場

粟津城の書割り、杉の立櫛、中央の松の立櫛の前に穴を掘る仕かけあり、幕明く。

下手から六尺棒に提灯を持つ仲間二人、上手に通り過ぎる。

研屋辰次、提灯を持ちそのあとに平井家の仲間市助、鍬を擔ぎ出る。

守山 なんと云ふ暗い晩だ。

市助 提灯がなけりやひと足もあるけねえ。

守山 足許の根つこに氣をつけろ。

兩人、舞臺に來り、辰次、松の立櫛を見て。

守山 コ、この松だ、ソレ、この松の前に穴を掘り、市郎右衛門を突き放し、只一ト討ちと言ふす法だ。

市助 なんであらうと折角侍にまで取り立てられて、今更それを棒に振るとは、氣の短い人だなア

守山 かうなれば手前も意地……とは言ふもの、拙者の事だから、ちゃんと見積りをつけてやる仕事と申すのは、手前もこの粟津におつたのでは、兎角前身が邪魔をいたし、出世は愚か、茶坊主扱ひにされ通し、いくら奥方を丸めてもとても物になりさうもない所から、すつかり侍には見限りをつ

けてしまつたのだ、どうせ先きが見えたからはいま、での腹癒せ、あの老ほれを蹴り殺しにしてやらねば、手前料見がならぬのだ。

市助 なんほ老ほれとは言ひ乍ら、武藝自慢の市郎右衛門、こりや十兩ちや合はねえ仕事だ。

守山 今更足下を見るとは圖太い奴だなア。

市助 一ツ間違へば笠の臺が飛ばうと云ふあぶねエ仕事の合棒だ、云ひなり放題出す處だ。

守山 何を申す、まだ仕上けも見ぬ中に云ひなり放題に出してたまるものか……それはさうと、モウ夜も大分更けてゐる、ソロ／＼穴堀りにかゝらねばなるまい。

市助 まだ六ツを打つたばかりだから、提灯は見えねえだらうよ。

守山 今から來られてたまるものか、……無駄話に夜が更ける、サア市助、早くその鍬で堀つてくれ掘つてくれ。

市助 なんだ、穴堀りか、笑談云つちやいけねえ、そんな事は約束の金の中には這入つてはるねえ、いはば今夜は大事なお客様だ、穴なら自分で堀りなせえな。

守山 イヤ、何と云ふ現金な奴め……エ、身共も侍……ツベコベ云はぬわ。

市助 駄賃を出すと云ふ處か。

守山 イヤ……身共が勝手に堀るのだから。

市助 そんなら……それ鉄。

市助、鉄を辰次に渡す。辰次、松の立樹の前に來り。

守山 よしく、何も穴を堀るのにまで、人手をかりねば

ならる事はないわい。

これより穴堀りにかゝる。

守山 ム、昨夜の雨で土がやわらかいのが、何より仕

合、……手前穴堀りは今日が始めた……だが

思ひ出しても腹の立つは、家老を始め青侍、よつ

てたかつて、倒當拙者に穴堀りまでさせるとは……

……意地の悪いやつ等だわ……併し手前世の中

なんてものは極く安値にすむものと思つてゐた處

ヤレ侍は劍術がどうの斯うのと……そのくせ彼

奴等だつて一から十まで知つてゐるものはあるも

のか……思ふとそれを無氣になつて怒つて見た

のは、少し人がよすぎたかな……何も拙者とし

て餘り物事を氣にかける質でもないが……侍に

見切りをつけたと云ふ事が……かうして穴堀り

をすると云ふ氣になつた第一の入札眼目、この次

手が家老を切つて……某に悪口を言つた腹い

せ。……第一あの老ぼれに、とられた品物だけ

でも……安い金ではない筈だ。穴のまわりを廻り

ながら、これは骨が折れる……中々深くならぬ

わい……コレ市助、市助何をしてゐるのだ。

一寸煙草を一服。

市助 とは又薄情な奴め、少し手傳ふ氣にならぬか。

守山 そのあとは一兩だ。……

市助 誰れが頼むものか。

守山 又穴堀りにかゝる。

守山 こんな骨を折つて、暗い晩に、堀端に穴を堀る、

考へると馬鹿くしい……何も侍を捨て、しま

へばこんなことをしなくつてもい、譯だが……

一寸殺して見たい氣にもなる……それに、明日

の城中の噂が聞きもの、市郎右衛門が馬場先きで

斬られてゐた……相手は守山辰次、彼れは餘程

の使ひ手であつたのだ……だが、拙者があなく

なつたあとで褒められてもつまらない咄し……

併し少し心細い氣がする……あんな老ぼれ一人

に大の男が二人がかりで……穴まで堀つて……

……それも只、殺してしまへばそれでい、のだから。

……(穴の中を見て)よし、餘程深くなつた。

ヤア、市助、提灯が見へるぞ

市助 む、たしかにあれだ……だがお前さん大丈夫



かね。

守山 ウム、……だが今夜は止めて、あすの晩にして  
もよい。

市助 イヤ臆病な侍だ。

守山 エ、何が臆病だ、手前に損をさせた上、こんな

穴まで堀らせる奴、もう斯うなつたら是が非でも  
殺してしまふばかりのこと……ソレ市助、忍べ  
忍べ。

兩人、提灯を消し、忍ぶ。

平井市郎右衛門、酒に酔ひ、仲間吾助提灯を持つ  
て先きに立つ。

吾助 市助は何處に参つたのか、旦那様のお下りに間に

合はず困つた奴でムりますな。

平井 今夜、歸城が殊の外遅い故、油断して何處かへ参  
つたのであらう……。

言ひながら、出る。

コレ、吾助、急に煙草がほしうなつた、提灯の  
火をかしてくれ……。

吾助 畏りました。

平井 少し御酒を戴きすぎてか、きつう煙草がほしうな  
つた、きつう煙草がほしうなつた。

煙草に火をつける事あり。

辰次、この中、松のうしろより首を出し。

辰次 コレ市助、提灯を消す合圖だ、い、な。

市郎右衛門、舞臺に来る。

平井、此の味は又格別ぢや。

この時辰次、提灯をおとす。

吾助 狼籍者！

云ひながら、上手へ逃はて這入る。

市郎右衛門、身を引く。

辰次、市助に突かれて穴におちる。

守山 コレ、間違つた。

平井 何、まちがつた。

市助 それ、守山、落した。

守山 エ、落ちたのはおれだ。

守山言ひながら白刃が頭上に落下するやうな、豫  
感におそはれて、  
思はず。

守山 人殺し！（叫ぶ）

そして、目茶苦茶に白刃を振りまわす。

守山 助けられぬ……。

是にて市郎右衛門、『何助けて』と云ひながら無要  
心に穴の側に來る辰次のやたらに拂ふ横難ぎに途  
ひばつたり倒れる辰次そのまゝ穴より飛び出し、  
下手に逃げて來て大地にへたばり様子を窺ふ。

市郎右衛門のうめき聲がする。

市郎右衛門 ウーム。

守山 ウーム——しめた。

市助 エ、びつくりした。

守山 市助か。

市助 うまくいつたか。

守山 エ、拙者を穴に突き落しておきながら何を申すのだ………だがあの唸り聲は市郎右衛門、拙者がた

しかに斬りつけたに相違ないな。

平井 おのれ、守山、だまし討ち………。

辰次、また大地に伏してしまふ。

守山 ウン、大分弱つているらしいぞ。

手深りに小石を拾ひ打つ事あり。

よし／＼びくともせぬはい。

やつと側に寄り。

エ、おのれ娑婆ふさけの老ほれめ、よくも拙者の一生を棒に振らしたな、義理しらすめ………。

辰次、めつた斬りに斬りつける。

平井市郎右衛門は、最後の切先き、辰次の足をか

すりそのまゝ撞となる。

辰次びつくりして飛び退き。

守山 ヤ、おのれ、あゝ痛い／＼斬られた／＼。

市助 何、斬られた。

守山 だまし斬りだ、いきなり足を………拙者、びつこ

になるのではあるまいなア、痛い／＼／＼コレ市助、モウ一足も歩けぬ、肩を貸してくれ／＼

市助 エ、仰山な——それはほんのかすり疵だ。

守山 エ、こんな目にあふ程なら、よせばよかつたに………モウ／＼待なんかは眞平だ。

市助 エ、そんな弱音を吐いて、今逃げた吾助の往進で

九市郎や才次郎が來たら何うするのだ、敵を討た

れぬ中早くこゝを逃けると仕様。………

守山 何——敵討——イヤ面倒臭い世の中だ——（立ち

上り）お、立てるは／＼、ではさのみの疵ではな

かつたのか——有難い／＼、エ、今の騒ぎで刀を

落してしまつたはい。（刀を探す事あり）オツト、

あつた／＼併し身共初めて人を殺して見たが、案

外にもろい者だが、相手は何しろ武術の達人、満

更拙者が弱いのもなかつたのだ、さう思ふと急

に偉くなつた様な氣もするわ………

この時、上手から吾助の案内にて、九市郎、才次

郎の兩人出る。

九市郎 コレ吾助何處ぢや／＼。

吾助 なんでも、このあたりでムいます。

このあたりでムいます、この聲をき、市助、辰

次の兩人吃驚する。

才次郎 兄上はどうなされたのか。

此の中辰次、花道に行きかける。

九市郎それをすかし見て、一寸さぐり合になり、

市助は下手に逃げて這入る。

才次郎は市郎右衛門の死體に躓付く。

ト、辰次、逃げて這入る。

—幕—

### 三幕目 信州越中の國境俱利

#### 伽羅峠の場

下手に番渡しの番小屋あり、それより下手の大柱の中へ  
つまさき上りの岩を突き出し、其處を登つてふごに乗る心  
持、上手の方は全く見えない、只二本の綱が張られてある  
下は數千丈の谷間の體。幕明く。

番小屋の番人徳五郎煙草を呑んでゐる。

平井九市郎旅姿にて出る。

九市郎 守山辰次が信州路に入り込みしと承り、弟才次

郎甲府にて出合ふ約束なるが、何かよい便りが來  
ればよいがな。オ、此所が名代の獅子戻りと申す

難所ぢやな。

徳五郎 ハイ、左様でゐいます、お侍様お越しなさるか

ね。

九市郎 シテ價は何程ぢや。

徳五郎 ハイ二十四文でござりますた。

九市郎 様か、では二十四文。

徳五郎 エ、有難うムへます。

この時、上手の蔭にて聲かする。

上手の聲 オーイ、八よ、そりや引け、客人だ。

下の聲 オ、合點ぢや。

上の聲 ソラ、引け。

上手から町人トの男、駕に乗り出る。

九市郎 オ、あの様にして渡すのか、氣味の悪いもの

ぢやが、間違はあるまいな。

徳五郎 何、旅人一人を落したら、下手人にとられます

わ。

九市郎 左様か。

この中町人の駕下手にはいり、駕は上手に引いて  
とる。

やがて町人は、下手の岩から下りて出る。

町人 ア、地獸の一足飛びぢや。

徳五郎 何がそんなものかね。

町人 ヤレ／＼又歸りに此谷を通らねばならぬと思ふと

苦勞ぢやなう。

徳五郎 エ、臆病な人だ。

町人 それ、二十四文おきますぞ。

徳五郎 有難うムへます。

町人、花道へはいる。

徳五郎

サア、旦那様、御待遠様でムへました、あすこまでいつて乗つて下せへまし。

九市郎

よし。

徳五郎

狭いからお刀は両手に持つて下されよ……それからあまり下は見ねえでな……

九市郎

承知ぢや。

九市郎、下手へはいる、この時上手にて聲、

上の聲

オーイ、八よ、こんだは侍の客人だ。

下の聲

オット合點だ、おれの方もお侍だ柿六ヤアイ、引いたり。

上の聲

合點だ、おぬしの方も引いたり。

これにて、下手から九市郎、上手から笠を冠りし守山辰次出る。

辰次、笠越しに九市郎を見てびつくりする。

九市郎は氣づかぬこなし。

やがて、相方の駕の接近する時辰次は刀を抜き、九市郎の駕の綱を斬る。

九市郎は谷間に落ちる、辰次、大急ぎにて笠を取り下を見る事よろしくあり。

——幕——

## 四幕目 吾妻屋の場

平舞臺下手の奥より、花道にかけてが街道の心、いつも

のところに門口、上手に中二階あり、正面に六段はしごあり、その上、下手に小ぎしき正面あきたてあり、その上手は狭い廊下の事、はしごの下に奥に通ずる出入口あり、門口に『吾妻屋』と記せし、かけ行燈あり。幕あく。

吾妻屋の亭主、清兵衛、下女のお駒、お市の兩人

門口より往來を見てゐる。

下手の奥より歸り馬又は二三人の旅人通りすぎる

その度毎に。

清兵衛

エ、お早いおつき様で、お宿りなすつてゐら

つしやいまし、吾妻屋は當方でムいます。

お駒

お風呂も湧いております。

お市

お泊りなすつてゐらつしやいまし。

言つてゐる。

守山

奥から守山辰次、手拭を持つて出る。

清兵衛

あ、い、湯であつた。

守山

これは、御侍様、モウお上りでムりまするか

清兵衛

只今すぐに御膳を差し上げます。

守山

これ、亭主、ちと承り度い事があるが、今夜の

清兵衛

泊り客は何人あるのだな。

守山

へい、お侍様の外に、お百姓さんのお泊りお二人、商人が一人、それだけでムります。

守山

左様か——では侍の泊り客は某より外にはないな

清兵衛 左様でムります。

守山 よし〜……………早く膳を出してくれ。

清兵衛 畏りました、只今すぐに差し上げます。

辰次は、そのまゝ上手の中二階に上つて行く障子を  
あけて中を見て。

守山 コレ〜、亭主々々。

清兵衛 ハイ〜。

守山 手前が風呂に這入つてゐる間に是に菓子置いて  
あるが、身共申付けた覚えはないぞ。

清兵衛 イエ——それはその——ハ、——是は又御笑談  
を……………

守山 イヤ、笑談ではない、身共菓子を大嫌ひだ、下け  
て〜。

お駒 でも、きらいでも出しておかねえと。

守山 エ、いらねと申すに。

清兵衛 コレ〜お駒、早く下けて来ればよいのだ——  
へいこれはまアとんだ失禮を。

お駒、菓子を下げて来る。  
辰次、障子を閉める。

清兵衛 イヤしみつたれな侍だ……………時にもう大分表も  
静かになつた、今夜にもう泊り客もあるまい……………

…表の行燈を入れておけよ……………。

お市 ハイ〜。

お市行燈を入れる。

清兵衛 それから中二階のお侍にお膳をさし上げてくれ

よ、氣むづかしさうな客人だから、氣をつけな。

お駒 ハイ〜畏りました。

お駒、奥に這入る。

前幕の平井九市郎、駕にのり出る。

九市郎 コレ〜駕や、まだ宿屋迄は餘程あるのかな。

駕屋一 イエ何、それ向ふに見えるあの家がさうでムい  
ますよ……………

九市郎 左様か、どうか早くやつて貰ひたい。

兩人 エイ、よろしうゐります。

駕を吾妻屋の前に置き。

駕屋一 若し旦那様、参りましてムいます。

九市郎 それは大儀であつた……………それから其方誠にす  
まぬが、あないを頼んでくれまいか。

駕屋一 エ、宜敷うゐります、少しお待ちなすつて下  
さいまし。

吾妻屋の門口をあけて。

エイ、今晚は……………旦那、いるか。

清兵衛これを見て。

清兵衛 オ、作十どんか、今歸りかね。

駕屋一 何にね、私等今日、客人を乗せて獅子戻りに行

つた歸り道、あすこの番人の徳五郎どんや柿六ど

んが武家を介抱してゐるだ、話を聞くと、何んでも悪る者に、ふごの綱を切られて仕舞ひ、俱利迦羅の谷底に落されたと云ふことだな――

清兵衛

オ、それは、怖い目にあはされたものだな。

駕屋一

それでもな、運が強いお侍でな、命にかゝはる程な怪我もなく、ほんのかすり疵を受けた位のもの丁度私共が通り合せ、駕に乗せてお前の家に案内をして来たのだ。

清兵衛

それは御苦勞だつた、丁度奥の座敷があいてゐるから、すぐ此方へお入れ申してくれ……………そりやまアい、事をしてくれた。

駕屋一

もし旦那様、サア御出でなせへまし。

九市郎

左様か……………

駕屋二

どうだね、まだ足は痛むかね。

九市郎

イヤ、どうも動くと痛んでならぬわい。

駕屋一

やア、早く今夜は寝さつしやれませよ。

九市郎駕より出る。

清兵衛

サア、旦那様、どうぞお入り下さいまし、どうもまア、御足がお痛みでは、お二階はかへつて御難儀でムりませうから……………コレ〜お市、早く御洗足を上げぬかい。

お市

ハイノ。

洗足をとる。

お市 旦那、洗つて下せへまし。

九市郎 これは忝けない。

足を洗ふ事あり。

清兵衛

モウ、あの獅子戻りと申す處へは、時に悪い奴が出まして、これで旅のお方などは御難儀をなさいます、でもまア、御怪我がなくつて重疊でムいしましたナ。

足を洗ひ終り。

九市郎

コレ〜駕屋、今日は種々と厄介に相成つた、是は拙者禮心ぢや、納めておけ。

駕屋一

これはどうも御多分に相難うムみます。

清兵衛

サア、お市、御案内申上げろ。

お市

アイ〜。

この時、辰次、中二階の障子を細目にあけて、九市郎と顔を見合し、びつくりして閉める、九市郎不審のこなし。

お市 さア、お出でなせえまし。

九市郎、そのまゝ奥にはゐる。

駕屋一

旦那様、あす、早立ちに駕に乗つてくれる客人はねえかね。

清兵衛

よし〜今聞いてやる、まで〜(清兵衛、大聲にて)エ、お客様、明日の御立ちにお駕の御用はムいせんか、エ、御駕の御用はムるませんか、

エ、御駕の御用は。

皆黙つてゐる。

清兵衛、駕屋に向ひ、

清兵衛 作十どんや、あすは用はなささうだ。

駕屋一 さうかね、ではお休みなせえまし。

清兵衛 氣の毒だの。

駕屋二 何、ハイ、左様なら。

駕屋、下手の奥に這入る。

守山、上手の中二階より大小を抱へ、あはてゝ表へ出やうとする。

清兵衛 お客様、只今から何れへ御出なさいます。

守山 イヤ、何、身共は一寸。

清兵衛 お見受け申せは御立ちの御様……何んぞ御氣

に障りし事でも……。

守山 エ、是れ靜かにいたせ。人の氣も知らない

で……別に何も氣にいらぬと申す事は……イヤ氣にいらぬ。

奥からお胸臍をもつて来る。

お駒 あれ、お侍様、何處かに行くのかね。

守山 うるさい奴だナ、靜かにいたせ。

清兵衛 是は又心づかぬ事をいたしました、そしてそれ

は一體、何がお氣に入りませぬか。

守山 それはその、あの、あの座敷が氣に入らぬ、あま

り端近かで、騒々しくてならぬのだ……

清兵衛 左様ならあのお二階の小座敷、あすこにお變へ

申ませうに。

守山 エ、大きな聲を出すなど言ふのに、身共なんと

しても此所にはいらぬ、亭主、勘定ぢや。

辰次、土間に行き足拵へにかゝる。

清兵衛 でムりまするか、それなれば是非がムりませぬ

併し只今からお立ちなされても此の宿場に、外に

宿屋もムりませぬのに。

守山 よく、しゃべる奴だな……モウ、黙つてゐろ

と申すのに。

と、金を出し。

サア、勘定さへ拂へば、別に口をきく事もあるま

い、ソレ金。

清兵衛 是はどうも、御多分にありがたう存じます。

守山 い、から黙つてゐると申すのに。

この中辰次、脚絆をつけ、わらじをはいてゐる。

この時、花道から、平井才次郎出る。

才次郎 入口のうどん屋で、教えてくれた旅籠屋の目印

し、吾妻屋と申す行燈があると申すか、どれであ

らう、モウ大分、夜も更けた様子、早く宿がとり

たいもので。

本舞臺に来る。

その時、辰次、身仕度なして、表に出て才次郎を見て、ひつくりして戸を開てかぎをかける。

才次郎は氣のつかぬこなし、そして才次郎は宿屋を探す心持ちにて右左を見てゐる、下手に入る。

清兵衛

お客様、どうなされました。

守山

イヤ、何、身共、急病ぢや、急に寒氣がして參つた、亭主、早く、その二階に案内してくれ。

清兵衛

それはお困りでういませう、お顔の色も大さう悪うしますな。

守山

よく、いらぬ事を申す奴だ、二階の何處だ、何處だ。

辰次、わらぢのまゝ二階に上る。

清兵衛

ア、モシ土足で。

守山

エ、わかつておるわい(二階に上り)コレ〜亭主手前急病故、たれも參ることはならぬぞ、よいかよいか。

障子をしめる。

この時、才次郎下手より出で、

才次郎

許せ〜、當家は宿家の相ぢやが許せ〜。

清兵衛

ハイ〜、只今〜コレ〜お駒、そこいらをふいてくれ、方々泥だらけで、困つた侍だ。

才次郎

コレ〜許せ。

ハイ〜只今、あの侍は、なんと思ふて鍵をか

けてしまつたのだ、餘つ程變な侍だ。(戸をあけ)これは旦那様。

才次郎

當家は宿屋ぢやのう。

清兵衛

ハイ、左様でういます。

才次郎

夜が更けて、氣の毒ながら手足が延ばせればそれでよいのぢや、泊めて貰ふわけには行くまいか

清兵衛

ハイ〜宜敷ふみます共、サア〜お這入り下さいまし。

才次郎

では許せよ。

この時、奥からお市出る。

清兵衛

コレお市、お洗足を持つて來い。

お市

ハイ〜。

足を洗ひながら、

清兵衛

旦那様、すぐ御風呂をお召しなされまし。

才次郎

イヤ〜手前、風呂は澤山ぢや、それに夜食もすませて參つたからすぐ、床をのべて貰ひたい。

清兵衛

ハイ〜畏りました。

才次郎

今日は事の外草臥れた。

清兵衛

御道中は定めしおつかれでういませうな。

足を洗ひ終り。

お市

サア、お市や、中二階へ案内申せ。

お市

畏りました。

お市、才次郎中二階に上つて行く。



清兵衛 ヤレ、今日は騒々しい晩であつた、時にも

う何刻かね。

お駒 モウ、四つでムりませう。

清兵衛 ではもう表を閉めて、お前達もねたがい。

中二階からお市おりて来る。

お市 お寝みなさいまし。

行燈を消して来る。

清兵衛 コレお市よ、おまいも、モウ寝たがよい。

下女兩人 では旦那様、御めんなさえまし

兩人奥へ這入る。

清兵衛 ドレ、俺も一ト寝入り仕様か。

行燈を消し。

火の用心。

奥に這入る。

夜番大鼓、割り竹の音、この時、九市郎下締を襪

になし、上手の中二階に目をつけ忍び寄つてそつ

と障子をあげる、九市郎、刀を取つて斬りつける

才次郎、起き上つて、兩人暗中の立廻りあり。

才次郎 狼難者め、名を名乗れ。

九市郎 なんと。

才次郎 仔細を申せ。

九市郎 ム、其の音聲は弟、才次郎ならずや。

才次郎 さう言ふのは、中兄九市郎殿か。

九市郎 待て。

探り寄つて行燈をつけ。

九市郎 お、誠に弟才次郎、危い事であつたな、して

其の方は宵より此の家に泊つておつたのか。

才次郎 イ、ヤ、半時程前に着いたばかりでムりますが

兄上、如何なされたのでムりまする。

九市郎 さては辰次め。

才次郎 何、辰次……。

九市郎 イヤ、其の方と甲府に再會の約束なし今日俱利

迦羅峠にかゝりし折、辰次の爲に思はぬ不覺、ま

たもや、最前この家にて、チラと見受けし辰次の

姿……扱は早くもそれと知りて逃げ延びしに相

違なし、其の方にも種々話もあれど、心が急ぐ

何はしかり、亭主を呼んで尋ねると致さう、コレ

亭主。

この時、辰次、二階よりそつと首を出し、下の行

燈に水を流し、行燈を消す。

九市郎 ヤ、灯を……。

才次郎 兄上、御油斷あるな。

是にて兄弟、とも探り合ひになり。

辰次とはしごの處にてすれちがひ、辰次下に來

る。

この時、亭主奥から出る。

清兵衛 ハイ、御呼びでムりまするか。

この中、辰次かぎをはづし、そつと表に出様として、清兵衛に突き當る。

清兵衛 誰れぢや。

辰次、鼻を押へ。

守山 あの和屋と云ふ家は何處でゝります。

清兵衛 そんな家は知らぬわい。

辰次、そつとぬき足にて、門口をはなれ、一散に逃げて遣入る、兄弟は門口をすかし見る。

——幕——

## 大詰 第一場、丸龜在二本松の場

平舞臺、下手に茶店あり、中央に栗の立樹あり、こゝは大師参りの道、二本松の場、幕開く。

茶店娘、お琴、店を出してゐる。

下手から大師参りの仕出し大勢出る。時々百舌の聲。

お琴 お休みなすつていらつしやいまし、お早い御参詣でゝいます。

萬遍なく言つてゐる。下手から出る仕出しにかまはず、花道から平井九市郎弟才次郎の兩人、三度笠、大小、旅姿にて出る。

才次郎 兄上、御氣分は如何でございます。

九市郎 宿を出る時はとても今日は、あるけななと思つたが、只今は餘程心持がよくなつた。

才次郎 それは結構でゝいます、それにこの様な、天氣のよい日には、宿にゐるより、かうして出かけた方がよいかも知れませぬ。

九市郎 さうかも知れぬ。

兩人は話しながら来る。

お琴 お参詣でゝいますか、お休みなすつていらつしやいまし。

才次郎 兄上少し休んで参りませう、今日は御病後の事故あまり無理をなさるといけません。

九市郎 左程でもないが、では休んで行かう。

兩人は茶店に休む、お琴は茶などすゝめる、間斷なく、仕出しが上から下に土産を持つた町家女房娘二人出る、上百姓一人青物をつけし牛に水をやつて入る。

下手から三人づれが出て休む。

お琴 お休みなすつていらつしやいまし、お早い御参詣で御座います。

茶を出しながら言つてゐる。

才次郎 ヤア、お笠でもおとりなさいまし。

九市郎 左様いたさう。(笠を取る)

九市郎 まことに、今日は静かな好い朝だ。

才次郎 ゆうべから雨も上りまして、近頃のない良い天氣で御座います。お、兄上、百舌鳥が啼いてをります。

九市郎 (茶を飲みながら) お、百舌が、もう秋ぢやな、

朝夕はめつきり冷えて来た。

才次郎 月日の立つのは早いと申しますが、いつの間にか今年も秋になりました。

九市郎 私達の様に敵を探してゐる身の上では、いつ秋になつたものやら、春が過ぎたのやら、すこしもわからぬ。

才次郎 浮世の事はまるでわかりません。

九市郎 故郷の様子など知りたいものだな。

才次郎 すいぶん變つた様な氣がいたします、モウ二年になります。

九市郎 二年になる、早いものだ、姉上にお別れ申したのがまだ昨日の様にさい思はれてゐるのに。

才次郎 定めし、私達の歸りを待つておいでとゞいませうな。

九市郎 去年の秋は九州に過ぎしたが、今年の秋はかうして四國で迎へる、毎日々々西から東と、この様に探し廻つて居ながら、いまだに敵の行衛はわからぬ。

才次郎 まるで雲をつかむ様な事でございます。

九市郎 あてもなく、あるいてゐると云ふ事は苦しい事だ。

才次郎 私達は敵と背中合せに歩いてゐるのかも知れま

せん。

九市郎 そんな氣もする、二年はおろか、三年、五年、十年、いや私達が死ぬ迄も、敵に會ふ事は出来ぬかもしれぬ。

才次郎 怖ろしい氣がいたします、がしかし、そんな事は御座いますまい、私達が常にきかされてゐる敵討の話は、首尾よく敵を探しあてた話ばかりで御座います、神佛のお引合せかも知れませんが、死ぬまで廻り會ふ事の出来ぬ、敵に明日にも出合はぬとも限りません。

九市郎 勿論の事だ、只私達にはとかくいつの事か、わからない物足りなさがあるばかりだ、なんにもせよ、早く國へ歸りたい、國へ歸つてゆるくと手足をのばして見たいものだ。

才次郎 私も近頃はそんな氣がいたします、同じ事やいつ迄も思ひ詰めてゐるといふ事はつまらないものであります。

九市郎 敵討はもとゞ詰まらないものだ、武士の家に は妙な定めがある、どうでも、かうでも私達達は敵討に出なければならぬ結果になつたのだ。

才次郎 しかし國元を出ます時は大變嬉しい氣がいたしました。

九市郎は蓑入を出して蓑をのむ。

九市郎 私は近頃、敵が憎いとは思へなくなつて、亡き

兄上には申譯がないが、どうしても本當に憎めな  
いも時々憎いと思ふ氣持にはなる、しかし、それ

は兄を討たれた憎しみよりも、私達のこのやうな  
苦勞をさせる敵が憎い心持だ。

才次郎 兄上も私と同じ事を思つてゐるわしやうし  
かも私達は敵を討たねば國へ歸れません。

九市郎 それは立派においとまを願つた以上は……  
才次郎 討つて歸れば平井の家も立ち再び仕度も出来る

やうになり、人々にも褒められます。  
九市郎 只それだけの事だ。(辰江と私達を助けた事)

才次郎 この上は一日も早く敵を討つてしまはねばなり  
ません。

九市郎 彼の首には私達のいゝな幸福がつながつて  
ゐる。

町家の女房下へ入る、この内にも仕出し三四人上  
手に通る  
旅人三人柿栗賣り出る。

九市郎 大分人出がいたすな。  
才次郎 この先きの大師堂に、年に一度の開張があると

か申しますので、それへ參詣の人出でゐませう  
九市郎 では道すがら參詣いたし、武運長久をお願い申

さう。

才次郎 左様いたませう、今の私達にはそれがせめて  
の慰めでゐいます。

九市郎 ではそろ／＼參ろう。  
才次郎 左様いたませう、茶代をこれへおいてまる

ぞ。  
お琴 有りがたうございます、モウ御立ちで御座いますか

兩人は、笠を冠りわらじの紐を紐びなほしなどし  
てゐる。

江戸者二人。  
猿上に通る。

九市郎 このやうに休んでゐる時は、埒もない事を思ひ  
出すが、歩いてゐる間は氣が張つてゐるせいか、

心持がよい。  
才次郎 左様で御座います、向ふから敵が来る様な氣が

始終いたしてをりますから……では御供いたし  
ませう。

才次郎は立上る、不圖花道の方を見る、九市郎は  
まだ支度をしてゐる。

才次郎 兄上、兄上。  
九市郎 何う。

才次郎 兄上、兄上。  
才次郎、九市郎の袖を引く。

九市郎 どうしたのだ。

才次郎は一心に向ふを見てゐる。

才次郎 私の目違ひかも知れません。

九市郎 何が。

才次郎 敵で御座います

九市郎 何！。

才次郎 オ、彼れだ、正しく辰次だ、兄上、兄上、矢

張り彼れめで御座ます、敵が参りました、敵が。

狂喜する

九市郎 何れ〜。

矢張り向ふを見る。

才次郎 あすこに、それ〜これへ来るのでムいます。

九市郎 オ、たしかに研辰だ、敵の辰次にたしかだ。

この中参詣人出で、兩人の様子を見てゐる。

才次郎 違つてはをりますまいな。

九市郎 彼れに相違ない。

才次郎 兄上、いよ〜廻り合もましたなあ。

九市郎 私達の仕合の日は、今日だつたのに。

才次郎 不思議な氣が致します。

九市郎 私も不思議だ、探してはゐたもの、探し當て

たのが不思議な氣がする、有り難い、有り難い。

才次郎 夢の様でムいます。

九市郎 全く夢だ………選りに選つてこの道へ來るとは

彼の運のつきだ、今一足早く出立いたしたら、こ

の先きどんな事になるか知れなかつた、有りがたい、有りがたい。

才次郎 名のりかけて、すぐに斬つて仕舞ひませう。

九市郎 左様だ、それで事はすむのだ、町人上りの俄武

士、袋の鼠同然だ。

才次郎 しかし兄上を討つた野狐故、めつたに油断は出

來ません。

九市郎 オ、如何にも彼は兄上を殺した敵なのだ。

才次郎 彼れを殺せば國へ歸れます。

九市郎 左様だ、かう言ふ間にもアレ〜向ふからやつ

て來た、吾々を見て逆けられては面倒だ、忍べ

忍べ。

兩人は下手にかくれる。百舌の聲。花道から研師

辰次、今は武士、浪人風の扮装。

辰次 久し振りに生れ故郷に歸つて参つたが、矢張生國

はなつかしい。お、向ふの茶店も昔のま、だ。

参詣人は不思議相に辰次を見る。

辰次 大變な人だからが致してゐるが………コリヤ町人

何があるのだ。

手近な参詣人にきく、群集は黙つて辰次の顔を見

てゐる。

辰次 其方は啞か、人がものを尋ねるのに何故黙つて某

の顔ばかり見てゐるのだ。

又、外の群集に気がつき。

辰次 其方も某を見てゐるな、をかしの奴共だ、某の顔

に何かついてゐるものか。

此時、九市郎、才次郎の兩人下手から出る、襷を

かけ寸分の隙もない出立。

九市郎 研屋辰次。

大喝する。

辰次 エ。

九市郎 平井市郎右衛門が弟、九市郎ぢや。

才次郎 同じく弟才次郎、兄の敵、勝負いたせ。

いきなり、才次郎は辰次の腰の邊を蹴る。

辰次、まりの様に轉る群集は騒ぎ出す。

皆々 (立どまり) 敵討だ、敵討だ……

是にて上手、下手より大勢出る。

參詣人町人の一 何、敵討だ。

これにて江戸の町人出る。

參詣の町人二 どつちが敵だ、討つ方が弱かつたら加勢

してやれ、皆々、加勢してやれ……

騒ぐ、その隙に辰次は煙草盆を投げつけ。

辰次 親の敵だ、親の敵だ。

呼はり乍ら脱兎の如く群集の中にかくれる。

二人 それ!

兄弟は追ふて行く、參詣人は「敵討ちだ、敵討ちだ」と騒ぎながらあとにつづく。

——道具廻る——

## 大詰 第二場——大師堂百萬遍の場

舞臺、平舞臺處處に丸柱、白壁 障子にかこまれし大師

堂の内部。

朝日が障子に映つてゐる。

開帳を知らず太鼓の音にて道具止る。

坊主三四人忙し氣に右往左往する。

參詣人は神妙に百萬遍を繰つてゐる。

百舌の聲。

上手から、いきなり辰次か逃げて來る。

彼は大小を懐にかくし頬冠りをしてゐる。

群集の中に割り込み、すまして念佛を唱へ出した

障子の外に九市郎、才次郎の影が映る。

やがて兩人は堂内に這入つて來る。

九市郎 たしかに、この大師堂に逃げ込んだのだ。

才次郎 こゝより、外に逃げる處はございません。

九市郎 それ、片端より探せ。

兄弟は血眼になつて參詣人を見廻す。

辰次はいろ／＼な面相をして人相をかへて見出さ

れまいとする。

やがて才次郎が辰次を見つける。

才次郎 あすこに居りました、兄上居ましたく。

九市郎 おのれ、卑法者め。

參詣人をかき分けて辰次の側に來り、辰次の襟をつかむ。

參詣人は驚いて逃げる。

才次郎 もう逃がさぬぞ

九市郎 表へ引き出せ。

才次郎 サア立て、立て。

辰次 どうぞ、御勤辨を、御勤辨を。

九市郎 たわけた事を、サア早く出ろ。

襟元をぐいぐい引つばる。

辰次 ア、苦しい、苦しい、息がとまります、出ます、出ます、どうぞ手をゆるめて下さい。

九市郎 ゆるめてやるから早く出ろ。

辰次 ハイ只今出ます、只今……。

才次郎 サア早く出ろ、ぐづくいたしてると斬つてしまふぞ。

刀に手をかける。

九市郎 まて、堂内で血を流しては後が面倒だ、とにかく表に出せ、サア早く出ろ。

辰次 只今、只今、表に出ます、ハイ……。

辰次、二足三足あるき出し、いきなり丸柱につかまる。

辰次 どうぞ御勤辨を、御勤辨を……助けて下さいまし。

九市郎 その様な、卑怯なまねばかりいたす、世話のやける奴だ、仕方がない。

辰次に當て身を入れる。辰次、落入る。

九市郎 ソレこの間に表へかつぎ出せ。

才次郎 ハア。

兩人は假死の辰次をかつぎ、本堂の表に出てゆく

參詣人はその後から續く。

—— 道具廻る ——

### 大詰 第三場——大師堂裏手の場

舞臺。平舞臺柿の立樹、木林等入用、道具止まる。

敵討を見ようとする人達が犬勢詰めてゐる。猿廻し西國巡禮、町人、百姓、等思ひの仕出し。

町人の一 さつき逃げ出した侍は見つかりましたか。

百姓一 なんでも御本堂の内に逃げ込んだ相です。

猿まわし モウ、今頃はつかまつただらう。

百姓二 オ、こつちにやつて來るぞ。オヤ、二人の侍が最前の侍をかついで來るは。

町人二 それではモウ殺されてしまつたか、つまらない

がや、言つて居る。

上手より九市郎、才次郎の兩人、辰次をかつぎ出

才次郎 兄上、この邊がよいでございます。

九市郎 オ、よからう。

辰次の身體をおろす、上手から僧、良観出る、九市郎、良観を見て。

九市郎 お、只今は堂内をおさわがせ申して相すみません。

良観 いや、いや、して敵といふのは見つかりましたか

才次郎 大師堂の群集の中にをりましたをやうく連れ

て参りました。

左様か。(辰次を見て)

九市郎 イヤまだ尋常の勝負をいたしません。

良観 しかし、相手は死んでゐるではござらぬか。

九市郎 こやつ此上もない卑怯者にて手に合ひません、殊に御本堂を血に汚してはと存じ余儀なく息の根

をとめ、只今これ迄連れて参つたのでございますこれから勝負をしますのでございます。

良観 それや、それは、では敵討はこれからでござるか

才次郎 左様でござります。

良観 ハ、……………して討たれたは御身達の父御か、母御か。

才次郎 私共の兄でござります。

良観 オ、兄御を。

九市郎 こやつ元は膳所の町人にて刀の研師辰次と申ま

して御城内の御出入の都度、辨才利口を以つて殿様に取入り俄か武士となつてね武藝の事の口論より身の程を忘れ我れ等兩人の兄を討つて立退きま

した奴、二年の間探しまわり今日やうやう此處にて出合ひましたのでございます。

良観 ヤレくそれは定めし御苦勞をなされた事であら

う、いや、後ち程茶飯など進ぜます程に敵討ちがすんだら御立寄りなされ、お待ち申して居る。

二人 有難うござります。

良観はそのまゝ上手に入る。

九市郎は群集に向ひ。

九市郎 いづれも、あまりそばによらぬ様にして下され

才次郎 また、最前のやうに人込みの中に逃げ込むと我が困る故、あまり邪魔にならぬ様にして下さい

九市郎 サア、弟邪魔が這入らぬ中、早くいたさう。

才次郎 ハア。

九市郎 活を入れい。

才次郎 ハア。

才次郎、活を入れる。辰次息を吹きかへす兄弟は刀を抜いて左右から詰めよる。

辰次 ワアい……………



逃げ出す。

九市郎はその頭髪をつかむ。

九市郎 辰次、もう駄目だぞ、この上はいさぎよく勝負をいたせ。

才次郎 モウ逆がしはせぬ、もう少しでも逆けるやうな事があつたら有無を言はず斬つてしまふぞ。

九市郎 とても助からぬ命だ、卑怯な真似をして笑はれるな。

才次郎 サア、立て、立ち上つて尋常に勝負いたせ。

九市郎 サア立たぬか、サア立て。

左右から辰次に迫る。辰次は猫の前の鼠の様に小さくなつて黙つてゐる。

九市郎 何故、だまつてゐるのだ、サア立て。

打次郎 立たぬか、おのれ。

蹴る。辰次倒れる。

辰次 あなた方は私をどうしなさるのでございます。

九市郎 勝負して打果すのだ。

辰次 何故、その様な事をなされます、そんな、そんな怖ろしい事を何故なさいます。

九市郎 汝を殺したいから二年の間、苦勞をしてゐるのだ。

才次郎 汝を殺さねば我等は國元へ歸れぬのだ。

辰次 私しは、あなた方に何も悪い事をした覚えはござ

いません、それにそんな恐ろしい事を、……却つて私に同情をして下さる筈だ、それが本當の事だ、それに今更私を殺す、そりや、そんな事のあるわけはない。それはあなた方の本當の御心ぢやない、それはあの時、市郎右衛門様にいたしました事は私が悪いかも知れませんが、併し私だつて何も先方が何もなさらないものをあんな事をするわけはありません、あの時は随分ひどい事をなさいました、私の事を犬侍、茶坊主侍、研師職人のなんのかのとその上満座の中で私の顔に唾を吐きかけました、あの事を見て居た人は皆私の事を可愛想だと言つてました、もしあれがあなた方でしたらどうなさいます、そのまゝ、御我慢なさいますか、そんな事はありませんまい。……意地を御知りなさるあなた方なら、それに市郎右衛門様と私仲はあれですんで有るのでございます。

辰次、兄弟の様子を見て馴々しく。

イヤ何しろ暫らくでございました随分永くお目にかかりませんでした、イヤ、いつもながら御機嫌よく御目出度うございます、してお目にかつてをりますと、今更のように思ひ出しますは二年前の事……よく私にお金の御用を仰せつけ下さいました、平井様の若旦那、私の性によく學問の

御けいこをして下さりました、平井様の若旦那方  
そのあなた方が私しを殺す、ハ、ハ、ハ、馬鹿……  
……馬鹿らしいそんな事のあるわけがありません  
んハ……武士のあなたと町人の私が勝負をする  
ハ、ハ、そんな間違つた事はありません。

九市郎 黙れ、以前のよしみはよしみ、只今は其方は敵  
だ、われ／＼の兄を殺した敵だ、敵討は武士の習  
ひだ。

辰次 しかし、私は前に申上げた通り、あなた方に悪い  
事をいたした覺まはございません、何卒御勘辨を願  
ひます、御勘辨を……

才次郎 コリヤ、辰次、此の場になつて未練を申すな、  
たとへどの様な事があろうとも今更汝を助ける事  
はないのだ。

九市郎 時が延びると面倒だ、かれこれ申すな、サア辰  
次立上つて勝負しろ。

才次郎 サア立て、立て、立上つて尋常に勝負いたせ。

辰次 勝負を まアお待ち下さいまし、なんの爲に馬鹿  
馬鹿しい事をやるのでございませぬ、私はあなた方  
には、何もお恨みもございませぬ。

九市郎 マア、なんとも申せ、よい、立たぬなら立た  
ぬでよい、ソレ弟……

才次郎 ハア……覺悟いたせ。

辰次 お待ち下さいまし、立ちます／＼、立てとおつし  
やるなら立ちます。なんの爲めに立つかわかり  
ませんが立てとおつしやるなら立ちます、何んだ  
か私にはさつぱり譯が判りませぬ。

才次郎 立つなら早く致させ。

辰次 ハイ、只今立ちます、只今立ちます。

九市郎 サア、早くいたせ。

辰次 ハイ、立ちます、立ちます。

辰次、やらやく立つ。

辰次 これで宜しうございませぬか、サア立ちました、こ  
れでよろしうございませぬか。

九市郎 サア、立つたらその刀を持って。

辰次 エ、刀、そんなとんでもない、なんでそんなもの  
がお二人様、私はこれで澤山でございませぬ、これ  
でもう御許し下さいませ。

才次郎 おのれ又その様な、一寸免れを申すな、面倒だ  
持つのがいやなら持たなくともよい、サア覺悟い  
たせ。

辰次 イヤ持ちます、持ちます、ハイ只今持ちます、暫  
らく／＼お待ち下さいまし、持てばよろしいので  
ございませぬ、持ちます／＼。

辰次 あ……この刀で斬り合をするのでございませぬ  
刀を持つ。後、エ、どうも、刀を握る。

か。

辰次、いきなり刀を投げ出し。

辰次 九市郎様、お草鞋の紐が解けております結ばせて下さいまし。

九市郎 エ、いらぬ事を何といふ、いやな奴だ、サア刀を持って。

辰次 ハイ、ハイ、持ちます、持ちます。

辰次、仕方なく刀をやつと拾ふ。

九市郎 それでよし、その方も兄を討つたる程の手並がある、サア用意よくば、イザ。

才次郎 イザ。

兩人左右から詰めよる。

辰次はいきなり刀を投げ出して大地に座つてしまふ。

辰次 マア、おまち下さいまし、おまち下さいまし。

才次郎 おのれ、その様な卑怯な真似をいたす武士の作法と存する故、尋常の勝負をいたせと言ふに、おのれ左様な事をいたすなら、モウ容赦はないぞ。

辰次 左様ではございません、卑怯からではございません、たつた一言、たつた一言申上げたい事がございます、それから、斬る共突く共御勝手になすつて下さいまし。

この時、群集の中から

町人の一 よくく、臆病だ。

町人の二 あきれたものだ。

町人の三 まつたくだ。

才次郎 黙つて居て下さい。

辰次 この辰次が一生のお願ひ、私は腹からの町人、武藝の心得は更にごさいません、立合つたら私の殺されるはわかりきつております、勝負と云ふ事は判らぬからするのでございませう、處が私の負けるのは分りきつておりますから、せめて髪の毛なりと手の指なり、まアその位の處を斬つて我慢しておいて下さいまし、何卒その位の處で御勘辨下さいまし、私は覺になつても生きていたのでございませう、何、死ぬのは怖ろしいでございます、この上のお願ひは尻か股の處へ一、二ヶ所、それもかすり疵位の處で御勘辨下さいまし。

才次郎 世迷ひ言を申すな。

又群集の中から、

百姓 ソレ、うまく言つて居らうまた親の敵と云つて逆

ゆるぞ………

才次郎 え、黙つて居て下さいと申すのに、兄上………

齒がゆうございませう、兄上がお斬りなさらぬなら私が代つて、太刀を致します、いらざる事ばかりつべこべと、サア覺悟いたせ。

辰次の前に白刃を差しつける。

辰次は横つ飛びに飛び退く。

辰次 あゝ危い、お待ち下さいまし、勝負いたしま  
す、この様な處を不意にお斬りなさるのは卑  
怯です、亂暴です、どうしても殺されるのなら立ち  
上つて勝負を致します、それまで暫くの間待つて  
下さい。

才次郎 そんなら早く立て。

辰次 立ちます、しかしあなた方は、お情け深い方  
だどうで死なねばならぬ私故、せめてもの申譯に  
坊主になつて市郎右衛門様の菩提を吊ふ爲に諸國  
を廻つて歩きます事を御許し下さい、ハイ、今す  
ぐ坊主になつてお目かけます、譯なく殺される  
事が分りきつてゐる、私をお殺しなさるよりは、  
坊主になつた私を見てお笑ひ下さる方が本當の敵  
討ちではございませんか、何を命をおとり遊ばす  
ばかりが敵討ちではございません、私は弱い者  
をお殺しなさるのはつまらぬ事でございます、御兄  
弟様、さうでございませう。

才次郎 兄上、古狐めが何にか申して居ります。

九市郎 勝手な理屈をつけて此場を迹がれる下心だ、も  
う申すこともあるまい、そこで最後に一言、言つ  
てつかはす、我々は決して汝を助けないといふ事

を……………。

辰次 え……………。

才次郎 サア立て、サア立て。

九市郎 立たぬか、サア立て。

刀の先にて、チヨイ、辰次の尻や股を突く。そ  
の度毎に。

辰次 ア、痛い、痛い……………。

言つて飛び上る。

九市郎 サア、長く苦痛はさせぬ、一ト思ひに殺してや  
る、サア立て、立て。

又突くので、辰次は苦痛に堪へられなくなつて方  
方逃げ廻る。

ト、絶対絶命となり。

辰次 立ちます。

言ひながら、仕方なく立つ。

九市郎 よし、よし、しかし又座つて仕舞つたり何にか  
言ひ出すに於いては容赦なく斬つて了ふぞ。

辰次 ハイ、ハイ、わかりましたわかりました。

辰次は立上る。兄弟二人は上手に立つて白刃を中  
股につける、辰次は一寸見てアル、ふるえだす  
そして酔振ひか骨なしのやうに身體をグニヤク、  
させて一向敵對する態度になつて來ない、半ば意  
識してやつてゐるらしい。

兄弟は抵抗力のないものを討つ事も出來ず殆んど

持て余しの氣味。

才次郎 兄上、仕方のない奴でございませぬ。

九市郎 イヤ言語同断の腰抜け武士、ヤい辰次……………その方如き人間が暗討とは申しながら如何いたして

兄上を討つた、助太刀あつてか申せ。

辰次 (刀をなげる) ハイ、ハイ、左様でございませぬか。

ハイ、ハイ、有難うございます、申上ます、申上ます。

才次郎 その方、劍法を存ぜぬ故、めつた斬りに兄上を斬つたな。

辰次は苦しい思ひ出をさげやうとつとめる、この時、開帳の大鼓の音、響く、百舌の聲。

辰次 むやみに鳴す、あゝ、大鼓が聞えます、お、若旦那百舌も啼いてをります、いゝ天氣でございませぬ

まア暫くお休みなさいまし、未だ午前でございませぬ、暫くお休みなされまし。

柿の木を見て。

辰次 恐ろしく、すべて恐ろしく、お、この柿の木もよく色づきましたなあ。

九市郎 左様な事を聞いては居らぬ、兄上を討つた様子話せ。

辰次 ハイ、申上けます、申上けます、……………あの粟津様の御庭には澤山の柿の木がございましたが……………

…市郎右衛門様は柿がお好きでございましたなあ……………今思ふと夢のやうでございませぬ、魔がさしたのでございませぬア……………その頃よく御二人共

伏見町におあそびに御出でなさいましたなアそのお歸りに私の宅にお立よりなされて、コリヤ辰次

兄上には内密で五兩たのむ三兩たのむとあの頃は誠に御盛んでございましたな、その時分お庭の離れを御普請最中でございましたが、其後出来上り

ましてございませぬか。

九市郎 おのれ、……………黙つてゐればよい氣になつてさ

まゝの事を申す。

辰次 ハイ、ハ、イ御氣に障りましたら、何卒御勘辨を願ひます……………御勘辨を……………。

辰次、兄弟を盗み見て。

辰次 長年御苦勞なされましたな、今日お目にかゝりまして、今更申譯のない氣がいたします、お許し下さいまし……………。御許し下さいまし……………ア、

私は坊主になる御約束でございました……………

才次郎 兄上、こやつを殺さねば私達は國へかへる事が出来ませぬ、家中の者に顔向けが出来ませぬ……………

…サア斬つて了ひませう……………。それでいゝのでございませぬ。

九市郎 さうだ、今迄ためらつてゐたのか。こやつを探

すのに、いかに苦勞をしてゐたのかわらない、ソ  
レツ……………

弟に目配せする。

辰次あはてゝ逃げる、そして大聲にどなる。

辰次 勝負いたします。

これにて兄弟はまたためらふ。

九市郎 勝負いたすか。

辰次 いたします、だまし討はいけません、得心させて  
殺して下さいまし、勝負いたします、いかにも承  
知いたしました、私も覺悟を極めました、この上  
はモウおせきなさる事はございませんですからお  
安心なさいまし、いかにも研屋辰次、御兄弟に討  
たれます。

九市郎 よい覺悟だ、左様なくては叶ふまい。

才次郎 いらざる事にて時が移つた、然らば改めん、サ

ア用意はよいか……………

辰次 用意も何もございせん、あなた方は狼、私は鼠  
でございませぬ、弱い者を御殺しなされて何がお手  
柄になります、御自慢になります。

一寸とした反抗。

九市郎 黙れ……………又初めおつた、サア立てツ……………。

又刀の先にて腰をつく。

辰次 痛い、痛い、この様な苦しい思ひをするなら一ト

思ひに殺して下さい、その方がようございませぬ、  
……………サア勝負しませう、よろしうございませぬか  
よろしうございませぬか。

辰次、殆んど泣かんばかりなり。

九市郎 お、サア參れ、その刀を持って。

辰次刀を持つ。

辰次 サア、よろしうございませぬか、まだでございませ  
ぬ、私は弱いのですから、私の方から斬り込まし  
て下さい、まだでございませぬ、まだ、まだ……………

私はまだ、構へが出来てゐませぬ、今討ち込んで  
來ては卑怯でございませぬ、まだ……………。

手の甲で泣きこすり、刀を持って立つて居る辰次  
は勝負をする氣は毛頭ない、刀を投げ出し絶叫す  
る。

辰次 卑怯だ……………御前様達は卑怯だ。

十八 なにツ……………。

辰次 どう思つても算盤に合ひませぬ、あなた方は刀の  
尖で私の腰を突いて無理に勝負をさせ様とする、  
そして、やたらに私を殺さうとする、私は命が惜  
しい、私はあなた方に只殺される様な氣がします  
あなた方は兄を殺された敵と云ふにきまつてゐる  
それが私には分らない、武士の習ひとおつしやる  
が私は武士ぢやない、そんな掟は通用しない、そ

れに私は勝負をするのはいやなのだからその私を討つのは人殺しだ、敵討ちと人殺しとは違ふ、私を殺してあなた方は大手を振つて故郷に歸るでせう、敵討ちでない、人殺しをして……

才次郎 兄上、兄上、如何いたしませう。

九市郎 (せき込む) 憎い奴め、たとへ何んとあらうと世間の手前我々はおのれを殺さねばおかぬ、敵討でないと罵りたくば罵れ、只汝を殺せばそれでよいのだ、問答無益だ。

辰次 え、そんな亂暴な事がありますかものか、あなた方は人殺しだ、人殺しだ。

辰次泣く。

二人

………

辰次 この様にお詫びしても御きゝ入れ下さいませんか  
研屋辰次は武士ではございません、お、私は犬でございます、犬を切るのはお刀の汚れ、何卒御勘辨を、這つて歩けとおしやるなら、ソレこの通り這つてもあるきます。

辰次、犬のまねをする。

辰次 これ程にお願ひ申上るのでございます、何卒、何卒、御勘辨を……。

平身低頭する。

才次郎 兄上、兄上、如何いたしませう。

九市郎 始末の悪い奴だ。

兄弟は仕方なく木の根に腰を下ろしてしまふ。

辰次いゝ氣になつて長々と臥てしまふ。

彼はウン／＼とうなつて居る。

百姓一 いや、めづらしい敵討ぞ。

百姓二 とても、今日の間には合ふまい。

百姓三 この間に御参りの方を先にして来やうか。

百姓四 それがいゝ。

四五人上手に這入る、上手良観出る。

この體を見て。

良観 お、モウすみましたか。

九市郎 イヤまだでございます、この上もない卑怯者、困つてしまひます。

困つてしまひます。

良観 勝負をなさらぬのか、お、長々と臥てござるな。

才次郎 刀を持たすと座つてしまひます、手に合ひませぬ。

良観 それは／＼お、喉がかはいたと思つて麥湯を持つて参つた、おのみなさい。

二人 有りがたう存じます。

良観 誰しも死ぬのは嫌なものでございます、まア出来る事なら助けておやりなさい、同じ事でござるから、ハ、……では後にお出下さい。

良観這入る。

良観這入る。

良観這入る。

九市郎 あの前は中々親切なお人だ。

辰次 左様でございます。

九市郎 助けてやれとおつしやつてございました。

辰次 左様でございます。

九市郎 助ける事は出来ぬ。

辰次 左様でございますか、助けてやれ、どうせ駄目な

のだから、助けてやれ。

九市郎 たわけ者め、その方に申して居るのではないわ  
い。

辰次はそのまま首をたれてしまふ。

兄弟は騒ぐ。

町人 助けてやれやい。

町人 助けてやれ、とても駄目だ。

九市郎 辰次、如何にも其の方は犬だ、畜生だ、犬を切

る刀は持たぬ。

辰次 え……………

才次郎 勝手な處に行けツ、再び私達の目にかゝるな。

辰次 ……………

九市郎 犬待め……………

辰次を蹴る。

辰次 有りがたうございます、よく御降り下さいました

有りがたうございます、御立派な御仕打ちでござ  
います、有りがたうございます、サアあなたも兄

上と同じ様にお降り下さいまし、私は犬でござい  
ます、有りがたうございます。

才次郎 卑怯者めツ、兄上参りませう。

九市郎 臆病、腰抜け武士。

辰次 ハイ、有りがたうございます。

兄弟は辰次を蹴り、下手に這入る。

百姓一 いや、たう、助つてしまつた。

同二 すいぶん骨が折れたらう。

同三 しかし思ひ切つて弱い侍だ。

口、口にそしる。

辰次、がっかりして居る。

皆々 サア、歸ろう。

群集は捨て臺詞にて左右に這入る。

辰次は座り直し、ホツト溜息をつく。

太鼓の音。

辰次ビツクリする。

そしてやがて兄弟の立去つたのと反対の方に脱兎  
の如くかけ出す、物かげより兄弟は躍り出で、兄  
は後から袈裟かけに一刀、弟は前に廻つて横雑に  
一刀。

辰次血潮を浴びて慳と仆れる。

兄弟は顔を見合せる。

九市郎 やつと殺せた……………すいぶん骨を折らせた。

才次郎 これで安心して國に歸れます。



九市郎 然し、何だか私は急に國に歸るのがいやになつた。

才次郎 何故でございます。

九市郎 敵討をしたやうな、気がしない、辰次のいふ通り人殺しをした気がしてゐる。

才次郎 然し、此ま、歸らずにもゐられません。

九市郎 それはさうだが、國に歸つて人々に褒められる事が苦しい。

才次郎 何れせよ 直瀧置敵討をして歸つたと思ひませう、故郷の人は……。

九市郎 まさか、人殺しをしたとは申すまいなあ。

才次郎 だれが申しませう。

九市郎 では、ともかく歸國する事にしやう。

兩人は刀を納め、櫛をとる。

幕

### 浪花座七月興行役割一覽

守山辰次、童女一秤金（實は猪八戒）鼠小僧次郎吉（猿之助）  
平井九市郎、孫悟空、銀蠅の久太（八百藏）平井才次郎、沙悟淨、田島屋手代清七（小太夫）平井市郎右衛門、住職良觀、爺定十（源十郎）奥方萩の江、賈氏娘々々、田島屋娘お千代（歌門）  
八見傳内、靈感大王、馬士権六（瓶右衛門）湯島幸十郎、仲間市助、臣小怪、番頭與九郎（段猿）山田三左衛門、亭主清兵衛、參詣の町人、臣小怪 目明し金藏（米五郎）小平権十郎、火の番、參詣の町人、臣小怪、龜屋主人仁兵衛（笑猿）高橋三右衛門、賈氏娘愛々、龜屋娘おしま（龜松）賈氏娘憐々（銀之助）宮田新左衛門、魚籃觀世音菩薩（圓子）

### アムンゼン翁の文樂見物

去月廿六日、東京報知の案内で來阪せる北極の征服者ロールド・アムンゼン翁は廿七日午後一時卅分辨天座の文樂人形淨瑠璃を見物した。僅かの時間のために見物も随分と慌しかつたが、松竹白井社長の歡待に非常に満足して行つた。同座西二階の休憩室で開演中の組打の熊谷眞實の武者人形と野崎村のお染の女形を出して、人形遣ひ玉松と社長の説明に、お染と握手をしたり、熊谷の刀を抜いて興じてゐた。松竹樂劇部からの花束をうけて後、折柄開演者中の『菅原』の車引の段の梅王と櫻丸の出合の件りを見物した。

喫煙室

高橋蓼雨

五月二十七日、河内の長野、極樂寺に於ける文豪渡邊霞亭氏の塚開きに大阪中の俳優がまねかれた。

道頓堀で産湯をつかつた生えぬきの千兩役者が大勢集まる、こんなことは太古の昔から話にも聞かぬ珍事、まるで掃瀧へ御が下りたやうなもの、末代までも語り草と近郷近在の老若男女が集ひ来て寺院の内外は人の波といふさわぎ。

式が終つて幹部一同土地の温泉錦水樓へ引揚げ貸浴衣の上から蚊帳の吊り手を細帯がはりにしめてお膳の前へ座はつた。

盲人蛇に何んやら、大和の山奥で狩り立てゝ来たやうな土地の藝妓さん達、天下の名優を向ふへ廻はして京の四季やら越後獅々やら、頗る粗糲濫造な踊數番。

お酒の酔も廻はり座も崩れはじめた頃、實川延若すつくと立上つて東西俳優の假舞をや

る、砥らかな舌、器用な癖、物腰なら身振なら具さに天下一品、それがいつもの紋切型とはちがひ、當の本人を眼前に置いて、中村鷹治郎のおかゝる、中村雀右衛門の由良之助といった工合に役を全く逆にゆくので萬岳も崩るゝやうな拍手喝采。

やがて市川右團次の假舞、さすがの右團次四ツ這になりて、

「整形外科を聘んで下さい、背中の骨が折れさうな……」



俳優も俳優にあらざる人も銘々玉手箱をあけて隠し藝の数々、こんなことは開關以來はじめの終り、取わけて林長三郎のひとさしは如何に山出し藝妓にでもわかるらしく

「よう踊りますな、何んといふお方……」

「知れへんのんか、林長三郎といふ役者はん中村鷹治郎といふ人の息子はん……」

「へえ、そんなら此中に中村鷹治郎さんも居ますか」  
「居る、いひ當てたら褒美を早げる」  
藝妓、人もあらうに、わざと中村鷹治郎の傍へいて耳打

「旦那さん、有名な中村鷹治郎といふ役者はんはどのお方です、内證で教えて頂戴」



當日、込み合ひの電車の吊り皮へ蛙のやうにブラ下がつた御屋南北

「遣に薄絹に包まれたやうな連峯は金剛葛城左に響えてゐるのが笠置山、スグその寺は菅原傳授手習鑑で有名な河内の道明寺と申しまして菅公鎮祭へ左遷の折、覺壽尼に逢ひに來た相亟名殘の寺でございます、荒木作りの木像と、鳴けばこそ別れもつけられぬ音の聞こえぬ里のあかつきもかな、の有名な短册もあります、其後、土師の里、道明寺には斷じて鶏は育ちません」

と、得意の講演口調で大ヨタを飛ばす。折から停留場まへの空地に數羽の雄鶏が雌鶏

をつれ羽たゝきして、コケコロ。――

篤實さうな變風翁棒立となり鶏を指し嘘をつくなと聞き直る。

鶴屋南北平氣の平左「あれですか、あれは宿彌太郎夫妻の亡霊で……」

◇

その歸へりに中村鷹之助が長野の土手へ過つて小銀貨を落し懐中電氣を點し草叢をわけてさがす、やがて肘を曲げて腕時計を眺め「大分時間が経つた、ひよつとしたら電氣の藥代の方が高くついたら知れへん」と

即、モダン青砥藤綱。

◇

子役の片岡一兵衛母子は藤井寺驛へ途中下車して青葉繁る杜の中の社へぬかづきて掌を合はし

「五番に河内の藤井寺、まゐるよりたのみをかける藤井寺、はなのうてなに紫の雲」

もつちやりした聲で西國三十三所の詠歌。ブルドックのやうな靴を穿いて頬冠した田

植男がやつて来て

「これは辛國神社といふ氏神さま、西國五番の札所なら左の森がさうぢや」

一兵衛の母禿かゝつた頭をツルリと撫で、「まあ勿體ない、罰があたりしまへんか、拜み直しまへうか、どないせうく〜」

どうなと勝手にするがいゝ。

◇

村田嘉久子が申座の舞臺裏で「御當地のお客さまは観劇には御熱心でございますが、暮があとて居る時でも機販でよく物を召上りすから、妾達お芝居が演難うございます」

その、村田嘉久子の部屋には、クリーム、パン、コーヒ、握りずし、天麩羅、南京豆等

處せまきまでに並べて居る。

大道具方出前持の行手に立ふさがり

「東京の女優さんはよく物を召あがりますから樂屋が見にくうございます」

◇

八幡筋の床屋で、七月は浪花座へ猿之助が来る、狂言は何んであらうかとしなきだめの

最中、

また御招きにあづかり優曇華の花咲く春に逢うたこゝち

云々の記事。

「フム、今度は優曇華といふ新舞踊やせ」この人、阿呆かいな。

◇

ある人が岐阜から名古屋へ出張の際、米原驛で一錢五厘はづんで松竹の會計部へ鉛筆でハガキへ走り書の文句

「僕の向側に古代カールが腰かけてゐる、美人なれど月に一度は西洋洗濯にかけぬと顔の蕎麥粕が目立つ、云々」

會計カール算盤はぢく手をやめて手鏡出して鼻を叩き

「だつて、少々蕎麥かすのある方が却て愛想になります、ひとつもないと平凡すぎて無愛想だわ……」

銘々、はり子の虎のやうに首を左右にふつて、しばらくの間そばかすの展覽會。



▲……鈴木善太郎氏の言はれる如く、澤田がドン、キョーテ型の味を持つ俳優だ、とすれば、今度の『桃中軒雲右衛門』は既に高原慶三氏も言つてゐられるやうに、『新國劇』としては、些か邪道に這入つたものであらねばならぬ。

▲……この『桃中軒』の材料は松崎天民氏が提供したと言はれてゐるが、自分としては眞山青果氏の『平将門』『富岡先生』『大鹽平八郎』等の持つ思想、性格と同じやうな、所謂眞山型のひねくれた性情の『雲右衛門』であつたやうに思ふ。又、雲右衛門をして、あまりに哲学的)この言葉は適當でないかも知れぬが)に描きすぎてゐるやうである。

▲……澤田の雲右衛門は、勿論、脚本に依るのだらうが、感傷的な

どちらかと言へば狂的に近い性格の人間になつてゐた。が、浮月亭で倉田にせめられ、『おれたはたつた今、傷だらけのまゝに生きやうと決心してゐるんだ。』と言ひ切るくだりは、強く生きやうとする氣持が迫つてゐた。

▲……芝公園の住居、離れ座敷の雪の夕べ、泉太郎との物語『おれも愚痴を言ふやうになつたなあ』と降る雪を凝視め乍ら、身をかゝめ火鉢に手をかざし合ふ慕切れが寂しくつて良かつた。

▲……此大詰の病床にある雲右衛門は、少しも病人らしくない。寂しい人であらねばならぬ筈なのに『おれは天下の雲右衛門だ』一聲千金だ』と豪語して——これが雲右衛門らしいのだらうが——全體に、病人らしさが缺けてゐたやうに思ふ。

▲……中井の倉田は、ワキとして傑作であらう。次に根岸の松月老

人の老熟な藝を推稱する。すつかり祭文の三味線弾きになり切つてゐたし、浮月での酔態もなかなか味な所を見せてゐた。丸茂の泉太郎は、芝居が過ぎてゐた。千枝子の女雲右衛門は、藝人らしい感がなかつた。

▲……久松のお妻は、あまり働かなかつたが、堅實な舞臺を見せてゐる。泣けるやうにさへ歌つて下さりや、何時でも彈きますよ。と冷然に言ひはなつ所なんぞは、しみみりと見てゐる者をさして了ふ

▲……第二の極付『國定忠次』になると、今迄のひねくれた人物で妙になつてゐる氣持が、不思議にすうつとなる。始めて澤田の舞臺に接してゐる、といふ思ひがする正邪善惡、總てを直截に、丁度、小松五郎義包の業物を躍らして亂麻を絶つやうに、ときはきと片づけてゆく小松原の殺陣も、風と無言のうちに、あつさりとなつての

けてゐるのもうれしかつた。  
(横 哲)

六月九日 久し振りで澤正一派を見た。私は澤正を見て、すぐ最近、浪花座に京都南座に觀た、井上との比較が私の頭の中を往來した。澤正は柄の大いさに於て聲に於て力に於て、元氣に於て、優れてゐる。井上は熱に於て、情に於て勝れてゐる。尙、井上一座には藤村、正邦といふ様なよい相棒が數人ゐるが澤正一座には中井一人位のものである。で劇壇全體から云ふと私はやはり井上の方を勝れてゐると云ひ度い。但し女優について云ふと澤正の方がずつとまさつてゐる様に思はれる。

澤田の雲右衛門は仲々立派、唯時々チヨイ／＼目をむくのがあまりに變な目のむき方であつた。國定忠次に於ては得意のもの丈けに難はない。就中、山形屋店先など素敵と云ひ度い。

中井の倉田記者は脚本に於ける倉田がよい丈けに中井も役得であるが彼も亦すぐれた演出を見せてゐる。  
(本陣 良平)

雜誌道頓堀六月號拜見小生最大なる趣味文樂座人形淨瑠璃記事滿載大いに歡迎今後益々斯道發展の爲め何卒奮闘努力ありたし、就ては小生郷土藝術保存の爲め左の愚考を御參考迄。

- 一、文樂に於ける根強き因襲打破。
- 二、太夫三味線及び人形抜ひが諸名士及文士の交際研究意見交換等。
- 三、新作物又は珍らしき狂言を上演。
- 四、大衆開放の爲め番附をパンフレット式に改むる事。
- 五、新進援助斯道尙勵せしむる事例(へば向上會の如きもの)  
(楠本昌雄)

延若襲名以來の

## お家藝「恨鮫鞘」

### 三つの俗説を合せて 先代に書卸しが初演

松島八千代座の七月は松竹専屬大歌舞伎の涼み芝居で既報の如き顔觸れでいよ／＼七月二日午後三時半開幕初日を出す。

尚呼物の二番目「鑑もろとも恨鮫鞘」三幕六場は河内家のお家藝として先代譲りのもの大正四年十月浪花座で延二郎より延若を襲名せし折に上演、それ以來十三年振りである。當時の配役は香具屋彌兵衛(鴈治郎)おつま(福助)若野(魁車)助三郎(長三郎)丑松(右團次)清八(嘉七)矢鳥才兵衛(梅玉)古手屋八郎兵衛(延二郎改め延若)である、元來お妻八郎兵衛の傳説は大坂と江戸との兩方にあつて詳でない大阪の方は元祿三年没の元祖嵐三右衛門の唱歌に「涙の時雨、古手屋の仇と情をときわけの薄き契や八郎兵衛が妬の劍研ぎたて、吾と身をさく鰻谷」とあつたり、「南水慢遊」にも二人の殺傷沙汰が載つてゐる。また明和元年八月中の芝居に「文月恨切子」を上演されたがこれは當時の際物阪町の女郎若野が法善寺の鰻谷で

殺されたのと一夜漬けて仕組みこの藝題はお妻八郎兵衛狂言(享保二年上演)のをそのまゝ襲用してそこから若野殺しと妻八事件が絡らんで行つた。更に江戸兩國かくし賣女銀猫のおつまと立花町の吳服屋八郎兵衛の情話で明和ごろと傳へられる事件が混用された全く同名人物が東西に二件あつたとは信ぜられぬがたま／＼似た様な名の男女が似通つた事件を生んだことに戯曲化されたにすぎない。河内家のやる狂言は嵐三右衛門唱歌と若野殺しと銀猫のお妻との三つの俗説を合せて脚色されてゐる。最も先代延若初演は慶應元年三月筑後の芝居(今の浪花座)だがその以前明和六年には竹本座採りの「楳重浪華八文字」があり、ついで同年四月大西の芝居(後の筑後)に「堀江川浮名血汐」として歌舞伎に移りこれがまた文化十年六月中の芝居で「鑑もろとも」として上演されてゐるがいづれも大同小異のものである、この度は延若の八郎兵衛、霞仙のおつま、扇若の助三郎、壽三郎の察兵衛、大吉の典平次と矢鳥才兵衛、莚女の岩田屋おしげ等で活躍するが初演當時の役割を見るに八郎兵衛(先代延若)おつま(中村慶女)若野實は里見の娘お才(嵐三右衛門)助三郎(中村福助)丑松(市川團次郎)古手屋清八(市川團治)矢鳥才兵衛(嵐雛助)等である。

# 編輯後記

◇とにかく暑い季節に入つた

縁蔭にハンモックでも吊して午睡をむさぶつてみたい氣持がする。例年によつて夏の芝居は無入だらうと思つて、この月は『道頓堀』に囚はれない内容にするつもりだつた。ところが月のなかばも過ぎてから『猿之助來る』を聞いて驚かされたわけである。何分にも突然のことで、充分に編輯出來なかつたのをお詫しておきたい。

◇岡岡太郎氏は東北地方に御旅行中で、市川猿之助氏は稽古に忙しいために、各れも執筆が出來なかつたことを斷つて來られた。曾我廼家五郎丈からも何か頂くつもりだつたが、次回にゆづりたいとお手紙をよこされた。林和氏と畑

耕一氏から快諾を得たのであるが、とうとう締切までに頂けなかつたのを残念と思つてゐる。

◇木村錦花氏の『研辰の討たれ』五幕全部を本誌に掲載出來たのを讀者と共に悦びたい。東都劇場で大好評だつたものである。共に劇作に筆を染められる富子女史から美しい詠草十數首をよせられた。

◇特にこの月土田杏村氏から『演劇日誌抄』を頂いたのを悦んでゐる。山本修二氏の『思ひ出の虫干し』はなつかしい好讀物。豊岡佐一郎氏の『時代喜劇の餘生』はつねに私等の願望してやまない。

◇先月の文樂についで大西利夫、京極利行兩氏の感想及批評は興味ある問題である。猿之助丈のために楠田敏郎に感想を書いてもらつた。津村家村氏の『跛路に立つ新聲劇』

は當事者として必讀の文字。寺川信氏から『道頓堀雜考』を頂いた。『演劇雜感』を書いた小菅一夫君は新人。高橋蓼雨氏は本社の奥役で、こんど木村氏の脚本掲載にお努力にあづかつた。

◇あまり道頓堀には縁遠いやうに思はれるが、綿貫六助、吉田暎二兩氏の東都劇信は無意義なものでないと思つてゐる。前月に比して内容が貧弱すぎた感もないではないが、暑い時でもあり、餘りに理屈っぽいものも如何と思はれる來月も目立つた興行もないらしいので今から頭を悩ましてゐる。盛夏も近い。時節柄、先輩及讀者諸氏の御健康を祈つておく。

あま

姥谷生

昭和二年六月廿七日印刷  
昭和二年七月一日發行  
大阪府南區久左衛門町八番地  
松竹合名社

昭和二年七月一日發行  
七月號  
第十一輯

誌代は前金でお拂ひを願ひます。  
郵券代用は一割増にて御註文を願ひます。  
御相談の上廣告掲載の需めに應じます。

定價 金參拾錢 (四錢)

編輯者 姥谷久一  
發行者 鳥江鏡也  
印刷者 松本米藏  
印刷所 桃谷印刷株式會社  
電話南(三〇六三番)  
電話南(三七二三番)

發行所 松竹合名社  
大阪府南區久左衛門町八番地  
電話南(二四〇番)  
電話南(六六六五番)



中元の贈りもの  
.....には

大丸の商品券を

大阪 神戸  
京都 金澤  
各店共通

業 休 曜 月  
業 營 間 夜

大 阪 心 齋 橋

大丸呉服店



昭和一年六月二十八日印刷  
昭和一年七月一日發行



若く明のS 顔にたな

トート白粉

東京 大阪 平尾替平商店

金參拾錢 (郵稅)